317
818

誰ニモ得心ノ行ク

識知の愛戀慾性

工博學醫
羽太鋭治著

始

特220
81

何人も得心き 性慾戀愛の知識

醫學博士 羽太鋭治 著

東京◇白文社◇發行

性慾戀愛の知識目次

第一章　緒論……一
性慾學とは何ぞ……二
性慾學の研究事項……七
性慾研究の大勢……一三
第二章　生殖器と其作用……二二
男子生殖器……二六
男子生殖器と性慾との關係……三一
女子生殖器……三七
女子生殖器と性慾との關係……四一

第三章　性的特徴……四四
性的特徴の一般……四四
兩性の頭蓋……五四
兩性の腦髓……五九
感覺の比較……七〇
女性の心理的特徴……七五
女性の精神的能力……八〇
兩性の疾病率……八四
兩性の死亡率……九〇
女性の將來……九四
第四章　性交傳染病……九七

第一節　淋疾……九七
淋疾は如何にして感染するか……九七
淋菌とは如何なるものか……九八
急性淋疾の症候と療法……一〇〇
慢性淋疾の病理……一〇
慢性淋疾の症候……一一四
慢性淋疾の診斷……一一七
慢性淋疾の治療法……一二二
男子淋疾の合併症……一二四
女子の淋疾と病症……一二五
淋毒性子宮内膜炎……一二五

婦人の淋疾と婦人科醫……一二七
第二節　黴毒……一二八
黴毒の病原は何ぞ……一二八
黴毒の傳染經路……一三〇
黴毒の經過……一三二
硬性下疳と其治療法……一三五
第三節　軟性下疳と其合併症……一四一
軟性下疳……一四一
軟性下疳の合併症……一四八
第五章　性慾進化論……一五三
放縱性交時代……一五三

結婚形式の進化……一五六
賣淫の發生……一六二
服裝の性的進化……一七三
性慾と道德感情……一七九
第六章　性慾の生理的心理的觀察……一八三
性慾本能とは何か……一八三
性慾發現の遲速……一八五
性慾と內分泌……一八八
性に關する羞恥……一九七
裡體と羞恥……一九八
男子を誘惑する武器……二〇〇

女性の誘惑と貞操……二〇一
嗅覺と性的衝動……二〇五
性慾と美的觀念……二〇六
性慾と自然力……二〇八
性慾の分析……二一一
食慾と性慾との滿足……二一三
性慾關係の裏面……二一五
男女性と其性情の差……二一八
男女性慾發現の差異……二二四
女性に於ける性慾の分類……二二五
女性の性慾と男性の情慾……二二八

第七章　變體性慾の觀察……二三一
體變性慾の各種……二三一
半陰陽……二三四
第八章　賣春の觀察……二三九
貞操犧牲の報酬……二三九
賣春は自己提供なり……二四〇
賣春と其原因……二四一
處女を裝へる賣春婦……二四九
娼家存置の可否……二五四
第九章　男子の性的煩悶……二七七
生殖器機能障害……二七七

目次終

生殖器神經衰弱……二八三
青少年の手淫……二八八
第十章　近代戀愛思想の觀察……二九一
性慾衝働と戀愛……二九一
性慾の第三帝國……二九八
忌むべき戀愛耽溺……三〇一
自由離婚の非難……三〇三
基督教的結婚觀……三〇七
不誠實なる結婚……三〇九

性慾戀愛の知識

羽太鋭治著

第一章　緒論

性慾は人間の有する大切なる本能で他の一なる大切なる本能食慾と共に自然に人に發動して來るものである。一體人間の有する本能は皆善であるべき筈である、若し之を惡と云ふ事があるとしたならば、それは之を調節せずして放縱にして置く處に在ると言ひたい。吾人にして意義ある生活を營まんと欲するならば、種々なる形式、種々なる狀態として現はれ來る諸々の慾望を調節し、統一して行く事が大切である。

性慾も亦この意味の下に取扱はれなければならぬ、無暗に禁遏することは正道でな

い、絶對な禁慾主義も又絶對な享樂主義も何れも誤りで、そこに過失を生じ或ひは罪惡を生むのである。故に啻に性慾を禁ずることも至當てはなく、又これを放任して其赴くが儘になすことも決して當を得たることではない。果して然らば之れを如何にすべきか、それは性慾學に於て研究せる所に鑑みて方策を定めねばならぬ。

性慾學とは何ぞ

性慾の意義に二種の區別がある。即ち狹義と廣義とであつて、狹義の性慾は人間の色情性交等に關する事實をいひ、廣義の性慾は高等なる有機體特に人類及び動物の、性慾生理、心理及び兩性相互の關係より、其の社會に及ぼす影響等を包括する故に、其の範圍が頗る廣い。

從つて性慾を研究する方法にも二種あつて、一は專ら文藝上から論ずるものこれを

非科學的研究といひ、一は主として醫學、心理學、人類學等から論ずるもの、これを科學的研究といふ。

非科學的研究は男女の戀愛結婚等に關する所謂ローマンスを叙述するものであつて科學的研究は男女性の相違、性慾の起源、發生、發達及び其の社會に及ぼす影響等を事實の上から觀察論斷するのを目的とするが故に、前者は詩化して抽象的であるが、後者は露骨で具體的である。

性慾思想及び其の問題が醫學の範圍から離れて、一科の獨立した學問となつたのは極めて最近の事で、獨逸の學者がこれに「性慾學」なる新名稱を冠したのである。

狹義の性慾は單に異性間に行はるゝ性交に過ぎないが、廣義の性慾は此の他にも多くの問題を含んでゐて、有らゆる有機體、特に感覺及び生殖力を有するものと密接の關係を有せざるはない。故に性慾學の中て論究すべき事項は頗る多く、これを科學

的に區分して見ると大體次ぎの如くなる。

第一部　純正性慾學、科學上から性慾の起源、發生、發達、男女の性的心理、生殖器の構造、其の作用、性の決定等に關する事項を論究する分科で、更に次ぎの小分科に分れる。

一、性慾生物學　性慾の由來、發達、生殖器の發生、性の分化等に關する研究の分科。

二、性慾生理學　性慾の發動と生殖機能との關係、內分泌と去勢、姙娠、遺傳、春機發動期に於ける性慾感情の變化等を論究する分科。

三、性慾心理學　性慾と感覺との關係、男女性慾の差異、性慾の發達、戀愛及び愛情等を論究する分科。

四、病的性慾學　一に性慾精神病學ともいふ。病的にして不自然に陷れる顚倒性

慾即ち變態性慾を論究する分科。

五、性慾人類學　人類學上より性慾に關する事實を論ずる學科であつて、生殖器崇拜、動物崇拜、結婚の歷史、婦人の待遇、性慾に關する神話、傳說等を研究する分科。

六、性慾倫理學　倫理學上より祖先崇拜と蓄妾、一夫一婦、一夫多婦、一婦多夫性慾禁斷の利害、純潔と破倫、情死、嫉妬、性慾と社會との關係等を論ずる分科。

第二部　應用性慾學、性慾の原理に從つて、人事百般に應用するものを云ふ。次ぎの各分科に分れる。

一、性慾衞生學　性慾の健康に及ぼす影響を論じ、性交、自瀆的遂情(手淫)、生殖器の畸形、異常、異常と性交不能、生殖不能、不適、花柳病の豫防、月經、避姙、禁慾、去勢、結婚、遺傳、新マルサス主義、人種改善等に關する分料。

二、性的特質學　一に性別學といふ。男女兩性の身體及び精神上の區別、男女の由來、發生、發達、兩性の分るゝ原因即ち性因等を論究する分料。

三、賣淫學　賣淫の起源、歷史制度、賣淫と社會との關係、檢徵法、賣淫婦の生活等に關する事實を論究する分科。

四、刑事性慾學　姦通、强姦、和姦、重婚、密賣淫、性的殺傷、其の他性慾より生ずる犯罪に關する刑法及び刑罰を論ずる分科。此の分科には更に、

五、比較刑事性慾學　この一小分科があつて、各國の犯姦律及び刑罰を比較して論究する。

六、性慾文學　文藝及び美術に現はれたる性慾卽ち戀愛、痴情等に關する事及び春畫、陰具等に關する事を論ずる分科。

七、性慾教育學、性慾心理學及び性慾倫理學、性慾衞生學等を基礎として如何に

兒童の性慾を善導啓發すべきかを論究する分科。

性慾學の研究事項

科學的に分類した性慾學は大體前述の通りであるが、今これに準據して其の研究題目を選定して見ると、略ぼ次ぎの如くである。

第一部　性慾の本性、本質及び性的現象に關する事項。

一、性慾の本性及び本質　二、性慾と社會　三、性慾と性交　四、性慾と生殖

五、性慾と結婚。

第二部　性慾に對する古來の觀念に關する事項。

一、宗教家、道德家の性慾觀　二、哲學者の性慾觀　三、教育家の性慾觀　四、法律家、刑事政策家の性慾觀　五、文藝家の性慾觀　六、科學者の性慾觀　七、

醫家の性慾觀。

第三部　生殖器の構造及び其の發達に關する事項。

一、生殖器の原始的構造　二、生殖器の發生及び發達　三、男女兩性に分るゝ原因　四、男性生殖器　五、女性生殖器　六、男女の身體上の區別。

第四部　男女性慾の差異に關する事項。

一、男の女に對する性的感情　二、女の男に對する性的感情　三、男女性慾の强弱　四、性慾遂情に於ける男女の狀態　五、男の純潔なる女を望む原因　六、女の男を選擇する理由。

第五部　婦人の性慾生活に關する事項。

一、婦人の春機發動期に於ける變化　二、月經　三、處女膜　四、妻としての婦人　五、母としての婦人　六、賣淫　七、婢妾。

第六部　兒童の性慾生活に關する事項。

一、兒童の性慾現象及び其の研究の歷史　二、兒童の性的特質（第二義的）　三、兒童の戀愛。

第七部　性慾と戀愛とに關する事項。

一、性慾と戀愛との關係　二、戀愛と事業との關係　三、戀愛と藝術との關係　四、戀愛の起源　五、愛情の發達。

第八部　性慾心理に關する事項。

一、性慾感情に於ける男女の心理狀態　二、男女の心意發達の狀態　三、男女の感覺　四、男女の知識　五、男女の感情　六、男女の意志。

第九部　性慾と倫理とに關する事項。

一、文野及び社會によつて異る男女の節操問題　二、純潔と破倫　三、一夫一婦

四、一夫多婦　五、一婦多夫　六、蓄妾　七、情死。

第十部　性慾と教育とに關する事項。

一、性慾教育の歴史　二、少年に性慾教育を必要とする理由　三、性慾教育の當事者　四、學校に於ける性慾教育　五、家庭及び社會に於ける性慾教育。

第十一部　性慾と民俗とに關する事項。

一、婚姻の歴史　二、生殖器の崇拜　三、淫祠　四、人と動物との結婚に關する傳說　五、性慾に關する神話　六、性慾に關する繪畫彫刻及び陰具

第十二部　性慾の起源、發生及び發達に關する事項。

一、原始的性慾　二、性慾と美貌及び雌雄陶汰　三、性慾と感覺　四、性慾と藥劑　五、性慾と食物　六、性慾と想像力　七、性慾と知識　八、內分泌と性慾　九、去勢上の事實。

第十三部　半陰陽と性慾とに關する事項。

一、半陰陽の原因　二、半陰陽の種類　三、半陰陽者の性的感情　四、半陰陽と病的性慾。

第十四部　性慾と賣淫とに關する事項。

一、賣淫の種類　二、賣淫の起源及び歴史　三、賣淫の利害及び其の存廢に關する問題　四、賣淫の制度及び其の社會的關係　五、賣淫と刑事問題　六、賣淫と私生兒及び其の救濟法　七、賣淫と殖民及び社會政策　八、賣淫婦の原因及び種類　九、賣淫婦の生活問題　十、賣淫の取締及び賣淫婦の救濟に關する問題。

第十五部　病的（變態）性慾に關する事項。

一、同性間性慾　二、體部狂　崇症　三、庶物狂　崇症　四、殘忍性色情狂　五、被虐忍性色情狂　六、性慾遺期症　七、性慾亢進症　八、性慾鈍麻症及び缺如

症　九、陰部露出症　十、獸姦及び屍姦　十一、近親姦淫　十二、偶像姦。

第十六部　性慾と刑事とに關する事項。

一、強姦、和姦、姦通等に關する姦淫罪　二、裸體公示、陰部露出、雞姦獸姦、性交、春書、文書等に關する猥褻罪　三、重婚　四、墮胎　六、殺兒、棄兒、虐待　七、嫉妬に起因する諸犯罪。

第十七部　性慾の健康に及ぼす影響。

一、性慾の適用と濫用　二、自瀆的遂情　三、性慾の禁斷　四、性慾と花柳病　五、性慾の滿足と不滿足　六、性交不能　七、生殖不能　八、性交不適及び生殖不適　九、春機發動期と性慾　十、月經と性慾　十一、姙娠と性慾　十二、遺精及び夢精　十三、性慾の持續年齡　十四、性慾と生命。

第十八部　性慾と人口及び人種改善に關する事項。

一、マルサスの人口論　二、新マルサス主義　三、遺傳　四、人種改善學　五、血族結婚と異族結婚及び異人種結婚　六、人工姙娠　七、優良種の保護。

大體上記の通りであるが、本書はこれ等の最も重要なる部分を選んで、其の一般を論述するのである。讀者若し進んで自己の好む事項を深く研究しようと思ふならば、更に適當なる研究書に就いて、各々其の好む處を選ばれるがよい

性慾研究の大勢

元來性慾學は最近の研究であつて、一科の學問となつたのは歐米に於ても最近の事である。其の以前の性慾思想は宗教說を根據とせる神秘的のものでなければ、通俗を主とする卑猥なるもののみであつたが、彼のダーウヰンの進化論が、世に出てから、從來の思想を一變して、性慾研究も稍や科學的色彩を帶ぶるやうになつた。

ダーウキンが「種原論」を發表したのは一八五五年で、今からざつと六十年ばかりであるのに、歐米の性慾學者が現今の如く進歩したのは、これ全く印度、埃及、ヘブリウ、希臘、羅馬等に於ける碩學哲人が遺した學術であるのを、後世の學者が相繼ぎ相承けてこれを大成したからである。性慾の不可思議なるは既にプラトーやアリストートルがこれを論じ、印度では釋迦が說いてゐる。これ等の思想が根據をなし、生物學や醫學や心理學の進歩と共に今日の如き組織的の性慾學を見るに至つたのである。

現今歐米に於ける性慾の研究は非常に盛んで、從つて著書も澤山あるが、世の研究の態度は國によつて特色がある。これを例へば、英國と米國とは其の研究の方法着實穩健で敎訓的意味を含み、獨逸は不羈自由で奇拔なる研究を好む風がある。併し獨逸人の研究は極めて眞摯で、着眼の高尙な事は他に比類が無い。これは獨り性慾の研究のみならず、凡ての學問に對して此の傾向がある。羨むべく且つ學ぶべき事である。

米國ではホリックといふ醫師が醫學上から生殖及び性慾に關する問題を研究し、多くの著書を出してゐる。其の中著名なのは「性命の起源」と稱する可なり大部の書で從來の宗敎的觀念を離れた新らしい科學的研究の試みである。

次ぎに社會學者で人類學、心理學、史學等に通曉してゐるウエスターマークが、婚姻史なる名著を出して、婚姻と性慾との關係を歷史、社會學及び科學上から觀察して、奇警なる論評と正確なる判斷とを下してゐる。

近頃はウオーリング、ストール、ウキルソン等が專らこれを研究し、特にストールはウード、アレン、エムス夫人、ドレーキ等と共に性慾に關する叢書を刊行してゐる。

英國では有名なハベロック・エリスが人類學、心理學、社會學其の他の方面から性慾を研究し、「男女」(小倉氏譯「性的特徵」)「性慾心理の研究」「性慾と耻感」等の名者を出

してゐる。エリスは元來人類學者であるが、心理學に造詣深く、現代思想界の趨勢に活眼を有する評論家である。其の文章の穩健にして美しいことばエリスの著書を讀む者の洽く知る處である。尙英國には遺傳學者カールピアソンが進化論の上から性慾を討究して、これを科學の中に入れてゐる。

佛國も性慾の研究は盛んで、ルッソーの「エミール」は云はずもがなであるが現代にも熱心な研究家や著書が頗る多い。中にも先年物故したメチニコフ博士は元來性慾學の專門家ではなかつたが、生物學、人類學、心理學、社會學等に精通してゐて、性慾に關して有益な研究を遺してゐる。博士は元露西亞の人で有名な不考不死諸者である事は洽く人の知る處である。

又、カバネーは刑事學上から性慾と犯罪との關係を論じ「去勢術と犯罪」なる書を出してゐる。其の他ハールペーは科學上から、クワイラーは倫理敎育上から性慾を研究して、前者は「兩性問題」を後者は「性慾思想の墮落」を說いてゐる。猶ゾラが文學上から性慾の觀察をしてゐる事は知らるゝ通りである。

伊太利には刑事人類學の開祖ロムブロゾーがある。ロムブロゾーは精神病學者であつて性慾學の專門家ではないが、事實の上から男女の心理、性慾を研究して發明する處が多い、又マンテガツアは醫學上から性慾を研究して有益な著書を出してゐる。

露西亞ではシユクルヤレウスキー、オルシヤンスキー等が共に科學上から男女兩性に關する事實を研究し、時々有益なる意見を發表してゐる。トルストイに「性慾論」や性慾に關する——多く禁慾に關する——著書のある事は人の知る處である。

瑞典、白耳義、和蘭、瑞西等にも研究家はあるが、これといふ大家はゐないやうである。然るに獨逸に至つては非常に盛んである。これは獨逸が他の列國に比して、言論が甚だ自由で、出版物の如きも極めて寬大であるからである。モール、フォーレル、

ブロホ、ローレデル、ブラシユコー等皆眞摯に性慾問題の解決に腐心してゐる。その嚴格な科學的研究と新發見の多い事は他に比類がない。

斯の如く性慾の研究は現時世界に於ける大勢である。これは蓋し性慾は人生と離る可からざるものであり、其の及ぼす處善惡共に非常に偉大であるからである。ドクトル●アルベルト●モールが其の著「兒童の性慾生活に」自ら序して左の如く云つてゐる。

「そも〳〵性慾生活の研究は最初の開拓者が爲したる如く、飽くまでも研究的にして科學に準據する事を忘れてはならない、此の方面に於ける以前の研究者はクラフト●エビングであるが、(著者曰く、クラフト●エビングは有名な「變態性慾心理」の著者で、獨逸の精神病學者である。)近代に至つてエリスが特種の研究によつて更らに此の方面の進歩を促した事は其功大なりと云ふべきである。

余は元來特殊の方面の研究を必要とするものであるから、先づ種々の理由から兒童の性慾生活を研究せんと欲するのである。そして余はこれをもつて大人の性慾研究の內容を豐富にし且つ又これより出發して次第に一般的の性慾を研究するの必要なる事を信ずる。而已ならず、近代の性的啓發は兒童性慾の精密なる研究を必要とし、有らゆる教育家及び兒童の精神生活を研究する者も此の研究を必要とする」云々。

次ぎはドクトル●ヘルマン●ローレデルが其の著「性慾教育階梯」に自ら序する處である。ローレデルは性慾教育の開拓者と云はれてゐる有數の學者で、該書は渺たる一小冊子に過ぎないが、其の內容は極めて充實してゐる。吾人が論ずる所の性慾教育論はローレデルの議論に負ふ處が多い。

『現代文明の持徵は、有らゆる方法に著しき革命を起した事にある事は、一般世人の熟知する處である。工業の方面に於ては十五年前と云はず、十年前既に吾人が夢想だにせざりしほど進歩し、商業、工業、科學等皆人目を驚かさざる無きに至つた。殊に

自然科學の進歩に至つては吾人をして應接に遑無からしむるものがある。古代希臘の哲人が云つた「萬物は悉く廻轉す」なる格言が、現代ほど其の眞理を發揮した事はない。醫學界に於てはレントゲン、ラヂウムの如き二十年以前の醫師が思ひも寄らざりし大發見をなせしのみならず、無意義なる舊道德より離脱して從來不必要と見做されてゐた性慾の研究すら開始せらるゝに至つた。

一八八六年、醫界の偉人にして此の方面の開拓者であるクラフト・エビングが「變態性慾心理」なる著書を出版した時は、廿五年後に其れが性慾科學と稱する一科の學問となつて、他の醫學の如く其の存在を認めらるゝのみならず、人生並びに文明の爲めに避く可らざる研究とならうとは思はなかつたであらう。

此の新たなる科學即ち吾人の所謂性慾學は現代の最も有名なる大學教授フォン・クラフト・エビング、オイレンベルグ、ブラシユマー、モール、ネツケ諸家によつて研究せられつゝあるが、未だ開拓せられない部分が多い。從來の研究の結果は人類の性慾生活を更らに深く研究する事の外、性慾倫理學及び其れと關聯せる性慾衛生學等の研究が、現代文明に對し絶對必要なる事を明かにした。

そして曾だに異常的なる又は奇怪的なる變態性慾が、二十年以前よりも全く異つた解釋を得たのみならず、普通の性慾生活及びこれと關聯して自瀆的遂情(手淫)及び賣淫の如き性慾罪惡將た又これと關係を有して感染力の激しい且つ其の傳播力の迅速なる花柳病等も悉く異なつた解釋を得るに至つた。斯くの如くして此の方面の啓發に關する著書、雜誌、研究會等が曾だに其の性慾學者並びに醫師の如き專門家の狹き團體のみならず、一般社會の人々の間にも起つて、一方に於てはこれが知識進めて豫防上に利用せんとし、一方に於ては性慾倫理を根柢として吾人の文明生活に深く彫り込められたる疑問を解いて國民を敎育せんとするに至つた。

第二章　生殖器と其作用

性慾作用を理解するには、順序として先づ其の機關の解剖生理の知識を得て置かなければならない。

生殖器は男女によつて、外形及び其の構造を異にしてゐる。併し其の性質及び發生は略ぼ兩性相一致してゐる。これを解剖學上から云へば、兩者何れも、

(一)　外生殖器　(二)　內生殖器

の二部に分れ、これを生理學上より區別すれば、兩者とも、

(一)　性交器　(二)　蓄殖器

の二種となる。

(一)外生殖器　とは凡て體外に現はれた部分で、男子の陰莖、陰嚢、女子の大小陰

唇、陰核、膣、バルトリン氏腺及び乳房等は何れも此の部類に屬する。

(二)內生殖器　とは體內に位するものを云ひ、男子の睪丸、輸精管、精嚢、攝護腺、コーペル氏腺、女子の卵巢、輸卵管、子宮等は何れも此の部類に屬する。

性交器は概ね外生殖器に屬するけれども、部分によつて必ずしも然らでない場合がある。何となれば、外生殖器にして蓄殖器に屬し、或ひは半ば性交器で半ば蓄殖器のものもあるからである。前者の例は女子の乳房、後者の例は男子の攝護腺、コーペル氏腺、女子の膣の如きである。

男女生殖器の一致點を對照して見ると、外生殖器では男子の陰莖、尿道、陰嚢と女子の陰核、小陰唇、大陰唇とが一致してゐる。內生殖器では男子の睪丸、副睪丸、攝護腺と、女子の卵巢、副卵巢、子宮と一致してゐる。

更にこれを胎生學上から對照して見ると左の如くなる。

外生殖原器

生殖阜より生ずるもの　男性　女性
生殖襞より生ずるもの　陰莖　陰核
生殖隆起より生ずるもの　尿道　小陰唇
　　陰嚢　大陰唇

內生殖原器

胚腺より生ずるもの　男性　女性
ウオルフ氏管より生ずるもの　睪丸　卵巢
ミユルレル氏管より生ずるもの　副睪丸　副卵巢
　　攝護腺　子宮

最初胎兒の外生殖器は男女の區別がない。姙娠第四週日頃から肛門や腸や泌尿を兼ねたクロアケンミユンヅングと稱する總排泄口が現はれる。孔の兩側に大きな丘隆がある。これを皮膚丘隆といふ。第三ケ月頃から尿管と腸管との間に會陰（ありの

とわたり）が生じて總排泄口が二個に分れる。此の頃から漸く男女の區別がつき始める。

男子は第四ケ月中に龜頭を生じ、第六ケ月に包皮を形成し、皮膚丘隆縫際が縫合して陰嚢を形成する。女子は小なる生殖結節が陰核となり、其の邊緣が小陰唇となり、皮膚丘隆は依然殘つて大陰唇となる。泌尿生殖竇は單に止まつて膣前庭となる。

尙、內生殖器及び泌尿器の發生に就て說明すべきてあるが、其れはたゞ胎生學上の複雜なテクニックばかりで、さして性慾研究の上に必要がないから一切省略するたゞ胎兒には初めウオルフ氏體やミユルレル氏管などゝいふ原器があるのみで、更らに男女の區別が無かつたのが、姙娠第二三ケ月頃から其れか睪丸となり卵巢となり、或ひは攝護腺となり子宮となるのだと心得て置けば宜しい。

男子生殖器

男子生殖器は概ね體外に現はれて、左右鼠蹊腺の間に在る。鼠蹊腺とは俗にいふ腿の附根であつて、其の前方は耻骨の上部に位し、後方は會陰を界として肛門に近接するが故に、生殖器は殆ど身體の中央に位すると云つて妨げない。

生殖器の體外に現れた部分は概ね性交の用をなすものであるが、中には睪丸、副睪丸の如く外生殖器であつて、藩殖器に屬するものもあり、また攝護腺、コーペル氏腺の如く半ば藩殖器で半ば性交器に屬するものもあるから、判然と區別する事の困難なるは前述の通りである。

先づ大體、これ等の器官の位置や系統を明かにして置く必要がある。左に其の概要を適記する。

第一、外生殖器

一、陰阜――は耻骨縫際の上部であつて、少しく隆起し陰毛を生ずる。

二、陰莖――は陰阜の下部から突出した一個の圓柱體で、中に尿道を通じてゐる。

三、陰嚢――は陰莖と會陰との間に擴張せる一個の嚢狀體であつて、其の中に睪丸及び副睪丸を含有する。

四、睪丸――は陰嚢の内部に存在する二個一對の腺狀體で、精子を生ずる用を爲す。これは元來體内に存したのが陰嚢内に降下したのであるから、眞の意味に於ける外生殖器ではない。

五、副睪丸――は、陰嚢の内部に存する二個一對の小腺體で、睪丸と結合し、其の末尾から輸精管が出てゐる。

第二、内生殖器

一、輸精管――は睾丸と結合した副睾丸から出てゐる一對の管で、精液を輸送する用を爲す。

二、精嚢――は輸精管から輸送される精液を蓄ふる一對の嚢である。

三、射精管――は精嚢内の精液を尿道に射出する一對の管である。

四、攝護腺――は一種の液を分泌する腺狀體で、此の分泌液は精子の活動を助くる用を爲す。

五、コーペル氏腺――は一對の腺で、これから分泌する液は尿道を潤滑ならしむる用を爲す。

更らにこれを解り易く説明すると、男子の生殖器中最も眼につき易いのは陰莖と陰嚢であつて、陰嚢の中には二個の卵圓體即ち睾丸がある。各睾丸は結締組織から成る處の睾丸白膜に被包され、其の一部は實質に侵入して縱隔をなす。此の縱隔によつて

區分された小葉は、種々多樣に迂回せる細精管より成り、細精管は互ひに吻合して附近の小葉と連絡する。此の細精管は精子を準備する處である。

偖て、細精管は約十二本の輸出管に集合して睾丸を出で、睾丸の後上部にある副睾丸を形成する。茲で又種々に迂廻して副睾丸を出て、遂に輸精管となつて睾丸の分泌物を輸出する用をなす。輸精管は鼠蹊管を通じて腹腔に入り、其れから陰莖に至る。

陰莖の中吾人の眼につき易いのは前方に垂下した部分である。これは陰莖の前部で後部は陰嚢及び會陰の皮膚に被はれてゐるから、外方から觸知する事は出來ても見る事は出來ない。陰莖の最前端は龜頭と云つて、幼時は包皮によつて被包されてゐる。龜頭の前端に尿道口があつて、此の尿道は陰莖全部を貫通し、膀胱に於て口を開き、排尿の用をなす。

陰莖の主要部は陰莖海綿體と尿道海綿體とによつて成る。此の海綿體が或る要項の

もとに多量の血液を欝充する。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

尿道の最後端は攝護腺に包圍せらる。攝護腺は排泄管によつて尿道に開口してゐる。攝護腺の後部膀胱底に左右二個の精嚢がある。輸精管と共に射精管に連絡する一の排泄管がある。此の排泄管は尿道の後部に開口し、睾丸で準備された物質を外部に輸出する用をなす。尿道の後部にコーペル氏腺があつて、其の排泄管は同じく尿道に開口する。其の他は皆精嚢及び尿道壁に開口してゐる。後者はリツトル氏腺といふ。

前述の如く、睾丸の中で繁殖に必要な分泌物が準備せられ、性交、自瀆、又は遺精、夢精等によつて體外に排泄せられる。此の睾丸分泌物は粘液性の液體で、顯微鏡で見ると無數の精子(精虫ともいふ)を發見する。

此の精子が女性の生殖器中に這入ると、男性の芽細胞となり、女性の卵細胞と融合して、受胎卵を形成する。(受胎作用に就ては玆に説明せず。)精子は前述の如く迂廻した細精管の壁に生ずるものであるが、幼少時代には其の種類極めて單純で、成長の後數種の細胞が發生するのである。其の中の一種なる精液細胞は性的に熟するに從つて増加し、種々なる變化階梯を經て精子を形成するのである。睾丸は又精子を發生するのみならず、他の特別の作用即ち内分泌をなす。これは性慾作用の上に重大な意義を有する。内分泌に就いては別に説明する。

精液が外部に排出されるまでには、尚他の成分が混交する。攝護腺液が其の内の重なるもので、其の他精嚢、コーペル氏腺、輸精管、恐くは彼のリツトル氏腺も、皆夫れ〳〵の分泌物が精液と混交する。故にフユルブリングルといふ學者は體外に排泄せられた混交物をのみ精液と云つて、單なる睾丸分泌物に對しては他の名稱を用ひて明瞭に區別したいと主張してゐる。

男子の生殖器には種々の異常や障害がある。中には醫療によつて治するものもあるが、到底治癒しないものもある。又異常や障礙によつて性交不能のものもあれば生殖不能のものもある。性交生殖共に不能のものもある。

男子生殖器と性慾との關係

勃起は前述の如く強度の欝血であるが、然らば如何にして此の欝血作用が生ずるのであらうか？　これは勃起中樞の刺戟によつて生ずるものであつて、最近までは背髓の下部が其の中樞と見做されてゐたが、此の頃ミユルレルといふ醫者が、骨盤の交感神經が其の中樞である事を唱道した。此の中樞の刺戟が即ち陰莖の欝血を來たし、次いて勃起を起させるのである。中樞を刺戟するのに二樣の方式がある。

男性が女性を見た時、腦から背髓を通過して、勃起中樞に或る刺戟を傳送せしめる。

又記憶心像中に心理的刺戟の生ずる場合がある。かゝる時は女性を見た時と同じく交感的女性に對する記憶が一種の刺戟を起させる。性慾挑發的な談話を聞いた時も同樣の現象を起す事がある。

變態性慾の場合は、同じく變態的な觀念が同樣の作用を起さしめる。同性的勃起——男性間の性慾——は其の男性を見るか、或ひは其れを想起する事によつて生ずる。狂崇症——或る特種の物に性慾を感ずる一種の變態性慾——は、其の狂崇する所の物品、例へば衣服狂崇症ならば女性の衣服を見、或ひはこれを想起する事によつて勃起を起す。

自瀆遂情者が適當なる重要部を刺戟すれば同樣の結果を生ずる。斯くの如き場合は刺戟が知覺神經を通じて刺戟中樞に傳播され、其れによつて欝血及び勃起に必要なる中樞の刺戟が生ずるのである。此の肉體的刺戟にある勃起は又陰莖及び尿道の炎症例

へば淋疾の如き病理作用によつて起る事もある。

其の他膀胱の充實の如き非病理的作用からも同樣の結果を生ずる。彼の精囊及び細精管の充實した場合も同樣である。又生殖腺の成長作、用後に說明する甲狀腺、松菓腺、大腦下垂體の刺戟も同樣の作用を起さしめる。斯くの如き內的刺戟は求心神經を通過し、內的刺戟を感ぜずして勃起中樞を刺戟するものである。

上述の如く、勃起を起さしめる刺戟は心理作用と筋肉の收縮作用との二樣に區分する事が出來るが、實際は大抵此の兩作用が連結して起るものであつて、性的旣熟の男子に於ては、精子の蓄積が勃起中樞を刺戟すると同時に愉快なる觀念が生じて更らに又勃起中樞を刺戟するものである。

勃起は又普通性交の際精液の射出を伴ふものである。從來は背髓の下部に特種の中樞があるものとせられてゐたが、最近に至つて交感神經骨盤綱にある中樞の作用なる

事が發見せられた。

此の刺戟は勃起の刺戟よりも一層强い刺戟であるのが普通である。故に精液を射出せずとも勃起を生ずる場合はあるが、勃起せずして精液を射出する場合は殆ど無い若し有りとすれば、其れは病的狀態(例へば遺精の如きに)である時であつて、精液射出の中樞は尙刺戟し得れど、勃起中樞が旣に疲勞し盡してゐるのである。蓋し勃起中樞の刺戟が血管神經に波及して陰莖を鬱血せしめ、精液射出中樞の刺戟によつて或る筋肉の運動神經を亢奮せしむるのである。

斯くの如くして、其の筋肉の收縮により集中した精液を射出するのである。勿論其の收縮は調節的で、其の調節的收縮は精液射出中樞の刺戟によつて起されるのである。此の精液射出の活動は數滴の精液射出と共に休止するものであつて、旣に早く性的亢奮の始めに起る事がある。これを快美外尿道漏といふ。

快美外尿道漏は精液射出筋が活動せずして精液を射出するのである。

以前は攝護腺の分泌によるものとせられてあるが、フユルブリンゲルは此の說を破壞して、リットル氏腺及びコーペル氏腺より射出せらるゝものである事を證明した。

性的亢奮は休止するまで快美感覺を伴ふものである。これには種々の時期がある。

（一）勃起

（二）同一程度の快美感覺

（三）射出と筋肉調節の結合との快感

此の三時期を經過すると、最後に退縮を來たすものである。そして快感の消滅と共に性慾も又消滅して、一種安心の感情を生じ、其の際疲勞を感ずるのである。

女子生殖器

外生殖器即ち外陰部に屬するものは陰阜、大陰唇、前庭、陰核、腟、バルトリン氏腺等で、內生殖器即ち內陰部に屬するものは子宮、輸卵管（喇叭管）、卵巢、副卵巢等である。

これ等の器官は生殖器として何れも必要なものであるが、就中特に重大なる關係と任務とを有するものは卵巢である。卵巢は男子の睪丸が男子生殖器を代表してゐる如く、女子の生殖器を代表してゐるものである。

女子生殖器も生理學上性交器と蕃殖器とに分れ、性交器は外部に、蕃殖器は內部に位する事は前に說明した通りである。併し、此の區別によると、乳房は外生殖器でありながら、而も蕃殖器に屬するものであり、腟の如き性交器でありながら、或る場

合には、蕃殖器の用を爲す等の事があつて、判然と區劃する事の出來ないのは男子生殖器と同樣である。以上、生殖器の各部の概要を記せば左の如くなる。

第一　外生殖器

一、陰阜――は外生殖器の最上部にして、陰毛を生じ、其の隆起の度は男子よりも著し。

二、大陰唇――は陰阜の下方に位する一對の厚き皺襞にして外面に粗毛を生ず。

三、小陰唇――は大陰唇の内側に位する一對の薄き皺襞にして、其の間に開ける孔は即ち膣口なり。

四、前庭――は膣口の上部にして、左右の小陰唇の間に位する部分なり。

五、陰核――は前庭の上部に位する一個の小突起にして、知覺鋭敏なり。

六、膣――は前に云へる如く、小陰唇の間の裂孔にして、前方は小陰唇に開き、

後方は子宮に接せり、其の間は管狀をなして性交の用を爲し、又分娩の際胎兒の産道となるものとす。

七、バルトリン氏腺――は膣口の上部に位する一對の腺なり。

第二　内生殖器

一、子宮――は一個の嚢狀體にして、卵子の發育を司る部分なり。

二、輸卵管――は子宮より卵巣に達する一對の管にして、卵子を子宮に送る用を爲す。

三、卵巣――は輸卵管の外端に位する一對の腺體にして、卵子を生ずる用を爲す。女子の生殖器中、先づ吾人の眼に觸れるものは二個の大なる縱隆起即ち大陰唇である。その中に更に又二個の小なる皺襞がある。これを小陰唇といふ。小陰唇の内部に二個の孔がある。上部の小孔は尿道外口で、下部の大孔は膣口である。

小陰唇が上部で結合する部分の陰核と稱する小さな物體がある。陰核の下に粘膜に被はれた海綿質の靜脈叢兩側がある。これを前庭球といふ。膣口の兩側にバルトリン氏腺と稱するものがある。これは男子のコーペル氏腺に相當する。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。處女膜と稱して重複した粘膜から成る一つの膜に遭遇する。此の膜が膣口を狹窄した狀態は種々ある。

膣口の奧は管狀の腔で、休息してゐる時は前後の兩壁が互ひに接觸してゐる。膣の上端に一つの口がある。これが子宮口である。子宮の上部兩側に各一個の小孔があつて輪卵管に通ずる。輪卵管は細狀の管で、子宮の外側に存する卵巢に接する。卵巢は男子の睾丸に當り、女子の胚種腺で內部に水泡狀の物質がある。これをグラーフ氏胞といふ。

グラーフ氏胞には各一個の卵子を有する。此の卵は女性が性的に熟して來ると四週間毎に成熟し、輪卵管を通つて子宮に達し、男子の精子に遭遇して受胎し、或ひは胎兒となり、或ひはその儘殘留し、或ひは子宮外に排出される。

卵巢に於けると同じく、子宮內にも又四週間毎に重要な作用を起す。血液を多量に集中して遂に子宮內に滲出し、それより膣を通過して體外に排出せられるのである。これを月經といふ。卵子が受胎して姙娠狀態に入ると普通月經は停止するものである。

先づこれ位に記憶して置けば宜しい。

女子生殖器と性慾との關係

女子生殖器の一部は、男性の場合と同一の作用を起し、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

生殖腺の狀態は肉體的刺戟と同樣の作用を有する。○○○○○○○○○○○○○○○

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。又快美感覺に關係ある處の靜脈綱を刺戟すれば靜脈血液が鬱充する。一般に生殖器に性的刺戟を與ふれば激しい血液の供給をなすものである。

又、男性の場合と同じく、〇〇〇〇調節的筋肉收縮によつて、粘液の分泌を増し、その際或る會陰筋及び膣筋もその活動を助ける。(子宮も同樣にその作用を補助するらしい)此の筋肉の收縮は分泌物を滲出するもので、男子の射精に相當する。併し此の分泌物は女性の芽細胞を含まない全く無關係の物質から成つてゐる。即ちバルトリン氏腺、子宮粘膜、膣粘膜及び陰部の粘液腺等から分泌する粘液である。

女子は又〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。これを快美外皇液漏といふ。此の快異外粘液漏は如何なる腺の作用であるか今尚疑問に屬してゐる。

女子の快美感覺は漸次昇騰して、次いで同樣の快感となり、やがて極期に達すれば直ちに消滅するものである。オット・アードレルといふ學者は男女の快感を次ぎの如く確定してゐる。

男子の快感は雪崩の如く増加して直ちに消滅するものであるが、女子の快感は漸次に増加して漸次に減少消滅するものである。併し男女間の快感には更らに他の相違點がある。それは女子には屢々快美感覺の缺陷する事がある事である。而も性慾の缺陷とは全然別物であつて、性慾は全く普通の狀態でありながら、快美感覺の缺陷する場合があるのである。

第三章　性的特徴

性的特徴の一般

吾人は前章に於て、兩性の第一性的特徴即ち性的機關の差異及び其の作用の差異の大體を說き得たと信ずる。然らば男女兩性は單に生殖器及び其の作用の相違のみあつて、他に相違する點はないかと云ふに決して然うでない。肉體的にも精神的にも頗る相違して居る。然らば如何なる點が如何に相違して居るか、それを此の章で研究して見ようと云ふのである。生殖器及び其の作用の相違を第一性的特質といふのに對して、此の一般的差異を男女性の第二性的特質といふ。

殆ど何れの人種に就て見ても。女は男よりも小さく且つ輕い。これは文明の度の進む

に從つて愈々其の度を加へて行くやうである。妊娠後同一の時期を經過した胎兒に就て見ても、女兒は男兒よりも其の容積が少い。ブロッスの說によると、出產の際に於ける男兒は同樣の女兒よりも平均一仙逆突長いといふ。そして最初の二年位は男女とも迅速に成長する三年目、四年目は聊か成長の度が緩く、その後十歲前後までは男子も女子も同樣に發育して行くが、春機發動期に達する前後は男性と女性と其の發育の度相等しいが、或ひは男性よりも女性の方が幾分優ることがある。ブロッスは十六歲乃至十七歲の娘は十八歲乃至十九歲の少年と相等しい大きさを有すと云つてゐる。これは單にブロッスのみならず、バウデイックもバグリアンもカエッテレット、アクスル、エレン・ケイなども認めてゐる所である。

成人した男女兩性を比較して見ると、體重、身長、胸圍共何れも男性の方が女性に優つてゐる。テノンの調査によると、男性の體格一〇〇・〇とすれば、

男性　一〇〇・〇　女性　八八・五

クラウゼの調査に從へば、

男性　一〇〇・〇　女性　八〇・〇

である。其の他の諸學者の說によれば、

男性　一〇〇・〇　女性　八四・九

の比例となる。

男性の體重の增加は四十歲に於て其の極に達し、六十歲から著しく減退し始めるものであるが、女性は五十歲まで增加し、減退も男性より晩く始まる。

フイロットが濠洲の黑奴に就て調査した處によると、

身長　男平均　一七二仙米突　女平均　一六〇仙米突

骨格の長さ　男平均　一六二—一七二仙米突　女平均　一五一—一六二仙米突

であり、クラウゼの解剖表によると、

自四十二歲 至四十八歲	男性體重　六四—六五キロ	自三十八歲 至七十六歲	女性體　五二—五五キロ

ブロッスの說に從へば、脊柱は男性身長の六九・七%であるが、女性同じく六六・六%であり、脊髓は男性は身長の四四・八%、女性同じく四一・七%、胸廓男性身長の二五——二六%、女性同じく二三——二四%である。

リカルゲーは男性の軀幹と身長との割合を一〇〇・〇に對する五三・〇、女性同じく五二・〇であると云ひ、女性と猿及び小兒は軀幹が下肢に比較して男性よりも非常に長いと云つてゐる。

肩胛骨は女性よりも男性の方が一層多く隔り、鎖骨は男性よりも女性の方が低く、稍や彎曲し、肋骨も男性に比して女性の方が一層彎曲し、且つ細く短い。

兩性の骨格で最も特徴を見出し得るのは骨盤である。男性の骨盤横徑は二五仙米突乃至三二仙米突、平均二八仙米突であるが、女性の骨盤横徑は二六仙米突乃至三五仙米突、平均三〇仙米突である。而も其の高さに至つては男性約二〇仙米突であるのに女性は一八仙米突を踰えない。此の廣狹の差は下部に至る程著しい。これは云ふまでもなく、女性は姙娠分娩といふ生殖上の任務をもつてゐるからである。

四肢に就て比較して見ると、上肢骨には別段の差異を認めないが、女性の大腿骨頸は骨の縦軸に對して強く傾いてゐるが故に、轉子が男性に比較して著しく突出してゐる。これもやはり姙娠分娩の關係と見られる。

骨格に關してはこれ位にして置いて、内臓と脂肪の狀態を比較して見る。

先づ心臓は身長に比例して女性の方が大きいやうである。ボイドの説によると、十四歳から二十歳までは男性よりも女性の方が絶對に大きい。其れ以後は男性の方が一

オンスぐらい大きいといふ。露國に於てフォータが調べた所によると、十二歳までは男性が大きく、其から十五歳までは女性の方が大きい。フイロールトの説によると、男性の心臓は其の出生當時の重さの十三倍になるが、女性の心臓は十二倍に滿たないと云ひ、オルトの説によれば、女性の心臓は二五〇瓦で、男性の心臓は三〇〇瓦、そして其の體重との比較は女性一對一六二、男性一對一六九であるといふ。

肺の重量及び容積に就ては、ラクウゼの説によると、女性の方が男性よりも身長に比較して大きく、其の重量は男性一四二四瓦、女性一一二六瓦で、肺と身長との比較は男性一對三七、女性一對四三である。ボイドによれば、其の出生當時は女兒の方が大きいが、二十歳から三十歳の間は男性の方が女性に比較して、其の重量の三分の一だけ重いと云つてゐる。

兩性の内臓を對比して最も特異なるは、發聲器の構造である。春機發動期に至る迄

は喉頭及び音聲にさして差異を認めないが、此の期に達するに及んで著しい差異を生ずる。其の音聲を比較して見ると、男性の音聲は概して太く濁りを帶びてゐるが、女性の音聲は纖細で鋭く而も甚だ輕快である。音樂上の言葉で分別すると、男聲の音聲は低音、次中音で、女性の音聲は中音、高音である。

斯くの如く男女性によつて音聲の異るのは、全く生理上の差異から生ずるのであつて、喉頭即ち發聲器の構造如何に因るのである。男性の聲が太く低いのは、其の發聲器に於ける聲帶が長い爲めで、女性の清く高いのは聲帶が短い結果である。ランドアによると、女性の聲帶の長さは、弛緩時一〇乃至一五ミリメートル、緊張時一五乃至二〇ミリメートルであるが、男性は弛緩時一五乃至二三ミリメートル、緊張時二〇乃至二五ミリメートルである。聲門の長さもこれに等しいが、全聲門は女性弛緩時一七ミリメートル、緊張時二〇ミリメートルで、男性は弛緩時二三ミリメートル、緊張時二七・五ミリメートルであるといふ。

男性の體格は骨及び筋に於て女性よりも優つて居り、女性は結締織の脂肪に於て男性よりも優つて居る。男性の皮膚の硬く且つ稜々と角張つてゐるのは、筋肉が完全に發達した歴證で、女性の體格が圓滿で皮膚が柔軟なのは、其の皮下に蓄積された脂肪の爲めである。

次ぎに兩性の血液に就て觀察して見ると、赤血球の數は男性の方が女性よりも多く、血液一立方メートル中男性は凡そ五百萬個の赤血球を計算し得るが、女性は凡そ四百萬個を數へ得るに過ぎない。白血球の數に就ては兩性の間に何等區別を認め難いが、ナッセは男性の白血球中〇・〇五八二四%の鐵分を發見し、女性に於ては〇・〇四九九%を發見してゐる。血液の比重に就ては、ハンマーシエラーグが男性一・〇六一、女性一・〇五四乃至一・〇五九であると報告してゐる。次ぎにペックキレル、ロージカル等

の血液の成分に關する平均數字を示して置く。

成分	男性	女性
水	七九一・〇〇	七九一・一〇
ヒブリン	二・二〇	二・二〇
中等脂肪	一・六二	一・六五
酸化脂肪	一・〇〇	一・〇四
燐酸含有脂肪	〇・四九	〇・四六
コレステアリン	〇・〇九	〇・〇九

成分	男性	女性
蛋白	六九・四〇	七〇・五〇
血球の乾燥殘滓	一四一・〇一	一二七・二〇
越幾斯分	〇・八九	—
鹽	五・九三	七・一四
鐵	〇・〇五六五	〇・〇四

次ぎに少し美術上から兩性の體格を比較して見やう。

軀幹の釣合は肩幅と腰幅とによらなければならない。肩幅は左右上膊頭間の距離を測り、腰幅は左右大轉子間の距離を測るのである。此の關係を兩性に就て比較して見ると、第一に吾人の眼にうつるのは、女性の腰幅の目立つて濶く見える事である。男性は其の反對に肩幅が廣く見える。併しサルワアジの解剖書によると、女性とても殊

更に腰幅が廣いわけではなく、肩幅と腰幅とは同一である。否寧ろ嚴密にこれを測定すれば、肩幅より十二分の一だけ狹いと云つてある。其れでは何故女性の腰幅は廣く見えるのかと云ふと、其れは臀部及び上腿が膨んでゐる關係からである。

臀部の大きいといふ事は婦人美の一つの條件であるが、希臘の美術家の作品の中には實感に動かされる事を怖れて、此の部を殊更に小さくしたものがある。併し希臘美術の中にも此の部を又殊更に大きく彫刻したものもある。ユヌス、カリピコスの如き宛としてホワテントット婦人の棚臀宜しくで、これでも困つたものである、エリスは希臘彫刻の殊更女性の臀部を小さくした事を嘆息して「爲めに女性美を抹消した」と云つてゐる。

我が國でも德川時代の畫家が、或る惡趣味に囚はれて、婦人の臀部を針のやうに細く描いてゐる。時代の人心に迎合し、强いて細腰に描いた藝術家の無定見は、エリス

の言葉其の儘借りて「爲めに女性美を抹消した」と云へる。

男性は皮膚が强靭で、筋肉が隆稜と角張つてゐるのが美しく、女性は皮膚が柔軟で、肉體の豐滿なのが美しい。男性美は豪健であり、女性美は纖麗である。

兩性の頭蓋

モルセリーが伊太利種族について調査した所によると、軀幹の割合に女性の方が男性よりも頭蓋の大きい事を認めた。併し支那人について調査した所によると、男子の頭蓋重量九一〇瓦の最大根と四四〇瓦の最小限との間に四七〇瓦の差があつたが、女子の頭蓋重量三一三瓦の最小限と八五〇瓦の最大限との間には五五〇瓦の差のある事を發見した。此の一例をもつて凡ての人種を律する事は無論出來ないが、兎に角此の調査の結果は、女性の頭蓋の差異が男性よりも著しいものである事を立證してゐる。

ダビスが兩性の頭蓋の容積を調査した結果は左の通りである。

種族	男	女	種族	男	女
歐羅巴族	一三六七（立方分）	一二〇六（立方分）	亞細亞族	一三〇四（立方分）	一一九四（立方分）
オセアニ族	一三一九	一二一九	亞弗利加族	一二九三	一二一一
亞米利加族	一三〇八	一一八七	アウストラリア族	一二一四	一一一一

次ぎはフイヒルツの報告である。

種族	男	女	種族	男	女
中部歐羅巴族	一五〇〇（立方分）	一三〇〇（立方分）	北部歐羅巴族	一七五〇（立方分）	一五五〇（立方分）
南部歐羅巴族	一二〇〇	一一〇〇			

次ぎは諸學者の研究を綜合したものである。

種族	男性容積千分に對する女性の容積	研究者	種族	男性容積千分に對する女性の容積	研究者
黑奴	九八四分	ダビス	マレー人種	九二三分	チーデマン
アウストラリヤ人	九六七分	ダビス	和蘭人	九一九分	チーデマン
ヒンヅー族	九四四分	ダビス	アイルランド人	九一二分	ダビス

新カレドン人	九一一分	ブロカ	支那人	八七〇分	ダビス
伊太利人	九二一分	マンテガツア	英國人	八六〇分	ダビス
アウフエルゲロート人	九〇四分	ブロカ	獨逸人	八七九分	ウエルケル
スラヴ族	九〇三分	ワイスバツハ		八七八分	ワイスバツハ
和蘭人	八八三分	ダビス		八三八分	フシユタ
グアノ人	八六九分	ダビス		八六四分	チーデマン
バスケン人	八五五分	ダビス	巴里人	八五八分	ブロカ
ヂユイネ人	八七五分	コベルニクス	アングロサキソン人	八六二分	ブロカ
ニーテルブレトン人	八七三分	コベルニクス	阿弗利加黒奴	八七四分	カロル

次ぎは一八三年に發表された身長に對する頭蓋内容の割合である。

身長	男性内容	女性内容	身長	男性内容	女性内容
一五五—一六〇cm	一五二七cm	一三九cm	一六一—一六五cm	一五五三cm	一四〇九cm

ドビナルドは末開人に於ける男女性の頭蓋容積の差異の少いのは、これ等の人類の女性の身長が男性と甚だしく差異が無いのに基くと云つてゐる。

アルノルド、ワイスバツハ等によつて發見せられ、マンテガツアによつて確證せられた所によると、女性は身長に關係する事なく、同一種族及び同年齢の男性と比較して短經頭であるといふ。

頭蓋指數といふ測定法がある。頭蓋骨の廣さと長さとの割合を示すもので、横の最大直經に百を乘じ、其れを前後の最大長經で割つたものが即ち頭蓋指數である。七〇・〇乃至七四・〇の指數を有する頭若しくは頭蓋骨を長經頭と呼び、七五・〇乃至七九・〇を中經頭、八〇・〇乃至八四・〇を短經頭、七〇〇以下を過長經頭と呼ぶ。割合に頭が廣ければ廣いだけ指數が高く、長ければ長いだけ指數が低いのである。

マンテガツアはポルガナ地方の九十七人の男兒に就て頭蓋指數を計測し、七九・一〇なる事及び少女十人に就て八三・三五なる事を發見してゐる。女性が男性よりも短經頭である種族は左表の通りである。

種類	研究者	男性頭蓋指數	女性同上
瑞西人	ヒス	七・〇三	七・一四
黒奴	フシユケ	七・一五	七・三〇
	ゲビス	七・三六	七・四〇
アイルランド人	ダビス	七・四六	七・六〇
佛國人	ジョベー	七・六八	七・九一
丁抹人	ダビス	七・八〇	七・八五
新カレドラール人	ブロカ	七・一六	七・二〇

次ぎは女性の頭蓋が男性よりも長經頭の種族である。

種族	研究者	男性指數	女性同上
和蘭人	ダビス	八〇・二	七八・五
巴里人	ブロカ	七九・四	七七・七
古代プルテン人	ダビス	七九・四	七七・二
中世紀の頭蓋	ヘルベル	七七・三	七七・一
ニーデルブレトン人	ブロカ	八一・七	八〇・六
英國人	ダビス	七七・三	七六・〇

種族	研究者	男性頭蓋指數	女性同上
ケアン人	ブロカ	七四・六	七六・九
西阿弗利加黒奴	ブロカ	七二・八	七四・四
支那人	ダビス	七七・四	七七・六
タスマニア人	ダビス	七三・七	七六・八
獨逸人	クラウゼ	七九・三	八〇・七
カナケン	ダビス	八〇・〇	八〇・五

種族	研究者	男性指數	女性同上
古代羅馬人	ダビス	七七・〇	七五・三
ヒンダー人	ダビス	七六・八	七五・三
バスケン人	ブロカ	八六・八	七〇・二
古代エトラスカ人	カロリー	八〇・二	八〇・〇
グリイランド人	ダビス	七二・五	七〇・四
亞加利米エキスモー	ダビス	七五・五	七四・一

併し、以上の頭蓋指數は人類の別を示すのには大なる價値があるが、男女性の對比には余り價値は無い。頭蓋の價値は要するに其の內容即ち腦髓の如何にある。次ぎに其れを少し研究して見る。

兩性の腦髓

男女兩性の差異の中で最も注意すべきは腦髓である。腦髓は所謂精神の府で、意識と思想との源泉である。諸人種の精神と態力とに優劣や差異のあるのは腦髓に基因してゐるやうに、男性と女性との知識や感情や意志などの相違もやはり腦髓が根抵となり基本となつてゐるのである。

腦量といふのは腦の質量の事であるが、一般に男性の腦量は女性の其れよりも多く量蠻人よりも文明人の方が多い。そして野蠻人の男女の腦量は極めて僅かな差しか示

してゐない。例へばオウストラリア人の男性の脳は同年齢の女の其れよりも重い事二十八瓦であるが、獨逸人や佛蘭西人になると其の差が平均百二十三瓦以上である。

マヌフリールの説によると、女性の脳の重量と男性の脳の重量との比例は、男性百に對する女性八十九の割合であると云ふ。今諸家の研究による二十歳から八十歳に至る男女の脳量を擧けて見る。

調査地方	研究者	男性腦量	女性同上
ハンノーヴエル	クラウセ	一四六一瓦	一三四一瓦
英國	ジムス	一四一二	一二九一
佛蘭西	ザベー	一三五八	一二五六
瑞西	ホフマン	一三五八	一二五六
差異		一五四瓦	
トピナル 男性		一三六〇瓦	
トピナル 女性		一二五〇瓦	

調査地方	研究者	男性腦量	女性同上
露西亞	ブルツエルト	一三四六瓦	一一九五瓦
墺國	マイネルト	一二九六	一一七〇
平均		一三五八	一二三五
差異		一一〇瓦	
ヒショウ 男性		一三六二瓦	
ヒショウ 男性		一二一九瓦	

差異		一四三瓦
ボドイ	男性	一三六二瓦
	女性	一二一九瓦
差異		一二三瓦
ヴグネル	男性腦量	一四一〇瓦
	女性腦量	一二六二瓦
差異		一四八瓦
フシュケ	男性	一四二四瓦
	女性	一二七瓦
差異		一五二瓦

ブロカ	男性	一三六五瓦
	女性	一二一一瓦
差異		一三三瓦
マヌー	男性	一三五三瓦
ヴリエ	女性	一二二五瓦
差異		一二八瓦
田口博士は日本人を調査して	男性	一三六七瓦
	女性	一二一四瓦
差異		一五三瓦

だと云つてゐる。

右の調査によると、男性の脳は一般に大きく、女性の脳は一般に小さい。併し此の統計的數字ばかりを標準にして、男女兩性の能力を推し測らうとすると、其所に大きな違算が生ずる。何故かと云へば、一般に體格の大きい男性は其れに準じて脳も大き

い譯であるから、兩性の腦を測定して正確な差を知らうとするには、先づ其の測定した腦量を基礎として、其の身長や體重などと比較した算盤を彈いて見なければならないのである。

ビショウの調査した男女兩性共體重の相等しい者の腦の重量の比較は左の通りである。

腦量の體重に對する%

體重	男性%	女性%
二〇・〇	—	四・四七
三〇・〇	三・七	四・三七
四〇・〇	二・九八	二・七〇
五〇・〇	二・五	二・二九

腦量の體重に對する%

體重	男性%	女性%
六〇・〇	二・一六	一・九九
七〇・〇	一・九九	—
八・〇〇	一五・九	—

正しく女性の腦量の劣る事を示してゐる。カロリーの說によると、男性の腦量と體重の比は一對四六乃至五〇であるが、女性は一對四四乃至四八であるといふ。ライヤ

の調査によると、二十五歲乃至五十五歲の人々の腦量と體重の比は、男性一對三七・五、女性一對三五の割合であるといふ。ビショウが腦の重さと年齡との割合に就て調査した結果を左に示す。

人類の腦の重量（一八八〇年）

年齡	男性腦量	女性腦量	年齡	男性腦量	女性腦量
一四——二〇才	一三七六	一二四六	五一——六〇才	一三四五	一二二八
二一——三〇	一三五八	一二三九	六一——七〇	一三一五	一二一〇
三一——四〇	一三六六	一二二二	七一——八〇	一二九〇	一一七〇
四一——五〇	一三四八	一二一四	八一——九〇	一二八四	一一二七

これによつて見ると、若い女性の腦量は男性の其に比較して大した差異は無いが、其の發育の終つた時、殊に高齡に赴くに從つて其の發育の度の著しい事が解る。

ハンモニーが灰白質及び白質に關する腦の比重に就て檢査した結果は左の通りである。

		最大量	最小量	平均量
灰白質	男	一・〇五三二	一・〇四二四	一・〇五四〇
	女	一・〇三三五	一・〇二九一	一・〇三一七

		最大量	最小量	平均量
白質	男	一・〇四二七	一・〇三四一	一・〇二八四
	女	一・〇三六六	一・〇三二一	一・〇三九九

斯くの如く、女性の腦量は其の體重に比較して見ても男性に劣つてゐるが、學者によつては（バルシャッハ、テイーデマン、サナームの如き）女性は體重の割合に男性よりも大きい腦を有してゐるか、或は殆ど同じ大きさの腦を有してゐると主張してゐる。フイロールトも女性の方が體重の割合には男性よりも大きい腦を有すると云つてゐる。

併したとひ女性の腦重が男性より大きいにした所で、其の精神上の能力が男性よりも優つてゐるとは云へない。何故かと云へば、腦髓の大小と精神上の能力とは必ずしも一致するものではないからである。さればこそ古來名高い學者や豪傑と云はれた人の腦髓が案外小さく、何等爲す所の無い平凡人の腦髓が却つて大きかつたりするのである。若し腦髓の大きい者が大智能者であるならば、身體に比較して最も大きい腦の所有者である所の小兒は、凡てこれ大智能者であると云はなければならない。

小兒が大きい腦を有する割合に其の智能の薄弱なのは、云ふまでもなく其の腦髓が未だ十分に發育成長しないからである。身體が未だ十分に發達しないのに腦髓ばかり先きて駈け拔けて發達すると、彼の神童と稱するやうなものが出來る。無論神童なるものは一種の天才には相違ないけれども、十中の八九は病的で、腦髓だけが勝手に獨り發達したのである。故に神童などと云ふものは五六歳ぐらゐで二十歳ぐらゐの能力を有する事は間々あるが、或る年齢に達すると、腦の發達が停止し、或は却つて遲れ、存外凡化するものである。『十で神童、二十で才子、四十過ぎれば只の人』といふ譬言があるが、これは決して根據の無い言葉ではない。

此の理論から推して行くと、完全な腦髓は身體と携行して發達したものでなければ

ならない。其れから又腦髓の發達といふ事は、たゞ分量の增加ばかりを指したのではなく、其の資質の發達即ち幼稚な水分ばかりの薄弱な腦が、漸次凝固して緻密な組織にならなければならぬ。腦の發達といふ事は此の緻密な資になるといふ事を第一條件とし、第二には脂肪が多く蓄積されるといふ事を條件とし、分量の如きは第三第四の事である。

小兒と大人との腦を比較して見ると、小兒の腦髓は水分が多い、それから女性の腦髓には脂肪が多い。此の點に於て女性の腦髓は小兒に近く、いくら其の分量が男性より多いにせよ、其の脂肪を差引いたならば、純粹の腦質は僅少なものになるわけである。

女性は一體脂肪に富んでゐるものであつて、獨り腦髓ばかりでなく、全身に普遍して脂肪が多く筋肉の分量が少い。脂肪は身體の構成上最も不定な物質に數へられて

ゐる燃燒性のものであるから、あまり價値のある物質ではない。其の價値のない物質が女性の腦髓の多くを占めてゐるのであるから、女性の腦髓がいくら大きくても、丁度脂肪肥りでブヨ〳〵してゐる身體と同じく餘り結構なものでない事が解る。

元來身體の發達は物質の增加即ち成長を要件としてゐるが、腦髓だけは其の例に洩れて、分量の增加よりも主に組織の完成を要件としてゐるのである。

此の事實だけで、もう男女兩性の能力に相違のある事が解る。男性の腦髓は身體の割合に小さいとしても、其の組織が緻密で大腦の表面が廣い。女の腦髓は脂肪が多くて其の組織が粗雜である。これを物に譬へて見れば、女の腦髓はボン〳〵時計のやうに粗大で、男の腦髓は懷中時計のやうに精密なのである。

兩性の腦髓は其發達の上から云つても相違する點が多い。ビショウの說によると、男性の腦髓は胚胎八ケ月にして既に異り、女性の胎兒の腦髓より大きいばかりでなく、

中央裂溝の前部が一層大きく表面の廻轉も深い。そして初生兒の男性の腦量は三三一瓦であるが、女兒の腦量は二八三瓦、其の差四八瓦であるといふ。

男兒の腦髓は六ヶ年で出生當時の二倍大となり、十三歳の終りに四倍大となる。然るに女兒の腦髓は六ヶ月で早や二倍餘、七歳でもう四倍の重さとなる。斯くの如く女性の腦髓は頗る急速に發達して、十歳で既に極大期に達し、其れからは僅かな發達に止まり、二十歳で早くも既に停止して了ふ。然るに男性の腦髓が極大期に達するのは十五歳乃至二十歳で、其の全く成長を停止するのは三十歳以後の事である。女性が早熟早成で、男性が晩熟晩成なのは斯うした差異があるからである。

以上、甚だ女性に對してはお氣の毒な結論であるが、たゞ茲に敎育と遺傳といふ事がある。腦髓はたとへ大きくとも敎育其の當を得なければ何の用も爲さない事は云ふまでもなからう。從來人の優劣や能不能を月旦するのに只單に腦髓の大小や質量を基

點として論じ、敎育の程度と遺傳を度外視した爲めに、往々具體的に說明し得なかつた。

彼の腦髓は小さくとも智能の傑出した者は、皆敎育其の當を得たか、然らざれば遺傳によつて先天的に能力を具へた者である。敎育の力も偉大であるが、遺傳の力は更らに又偉大である。彼のフランシスゴルトンによつて唱へられた人種改良學の如き、實に此の必要から起つたものである。

又、近來北米で黑人の間に間々白人を凌駕するやうな人物が生ずるに至つたのは正しく敎育の結果である。一體、人の腦髓は同じ組織と同じ模型から成立してゐるものであるから、根本的の差は無い筈である。たゞ其の敎化と境遇とによつて諸人種に特有の腦髓があるやうに思はれるのである。何人を問はず何人種を問はず、敎育と遺傳とを完全に利用したならば、腦髓は如何樣にでも改造し得るのである。

男女兩性の腦髓の差異も、畢竟するに古來からの習慣や因襲の型に箍められ、遺傳に遺傳して遂に今日の如き差異を生ずるに至つたのである。故に女性の腦髓も雖も、敎育と遺傳との力によつて、今後如何やらにも改造する事が出來るのである。斯う考へて來ると、敎育といふものゝ如何に吾人々生に重大關係をもつかといふ事を今更らに深く考へさせられるのである。

感覺の比較

ロンブロゾーが百人づゝの正常なる男性と女性とに就いて、觸覺の試驗を行つた結果、男性は女性よりも遙かに觸覺が鈍いといふ結論を得た。左表が其れてある。

鋭敏	男性 十六人	女性 三十一人	鈍感	男性 二十八人	女性 六人
普通	男性 五十六人	女性 六十三人			

味覺に關してはオットレンギーが實驗して、女性の百分の五十は鋭敏であり、鈍いものは僅かに百分の十に過ぎなかつたと云ひ、嗅覺も男性に比して著しく鋭敏であつたと云つてゐる。

ロンブロゾーが非常に興味のある試驗をしてゐる。其れは嗅覺の試驗に丁字香油、味覺の試驗にサッカリン、硫化ストリキニーネ、食鹽の三種を各々稀釋し、其の稀釋度によつて程度を定めた。云ふまでもなく、丁字香油は嗅かして見、サッカリン其の他の稀釋液は嘗めさせて見たのである。其の結果を平均數字に現はして見ると左表の通りである。

嗅覺(丁字香油液)

適度に知覺し得べき稀釋度

鋭敏なる定量的知覺ある者

味覺	女 $\frac{1}{34000}$	男 $\frac{1}{31400}$	
	女5280%	男7500%	

甘きものに對する（サッカリン液）　女 $\frac{1}{28600}$　男 $\frac{1}{74500}$

辛きものに對する（硬化ストリキニーネ）　女 $\frac{1}{51400}$　男 $\frac{1}{57000}$

鹽からきものに對する（食鹽液）　女4.49％　男0.58％

聽覺

右（セコンドを聽取し得る距離）　女14.6　男17.9

左（同）　女15.2　男31.1

これによると、聽覺は女性よりも男性が優り、嗅覺は男性よりも女性の方が稀薄なる丁字香油液を嗅知するやうに數字。上には出てゐるが、知覺力あるものゝ比例數にすれば、男性の方が遙かに女性の上である。味覺に於ては甘いものに對する知覺は女性の方が優つてゐるが、辛いもの鹽辛いものに對しては男性の方が優つてゐる。故に此の試驗の上から云ふと強ち女性の知覺が鋭敏だとも云へない。

フランス・カルトンも男性の知覺が女性よりも鋭敏だといひ、これを日常生活上から云つても男性の酒、茶の味及び羊毛の精粗を吟味する等の事は到底女性の及ぶ處でないと云つてゐる。

もう少し複雜した知覺といふよりは寧ろ能力試驗を行つた人がある。ロマネスといふ學者であるが、其の方法は同一のバラグラフを幾人かの高等教育を受けた人々に示し、二十行に就て十秒の時間を與へ、其の時間が盡きると同時に其の示して置いたバラグラフを取除け、讀んで心に殘つてゐるだけの事を直ぐに書き記して貰つたのである。併し此の試驗の結果常には女性の方が男性よりも多く成功したといふ。一體女性は斯うした事、例へば算盤の速算、同一のカードに同一の文字を記入するといふやうな事には、男性よりも優つた特種の能力を持つてゐるやうである。（此の事に就ては後

に述べる。）

苦痛に對する感覺に就ても幾多の學者が研究してゐる。マルチンは苦痛に對しては女性は遙かに男性よりも忍耐すると云ひ、齒科醫メタフは齒科手術に際して男性は女性よりも屢々卒倒する事があると云つてゐる。又、ブルノは痲醉劑が未だ外科手術に使用されなかつた時代の自己の實驗によつて、女性は却つて男性よりも平然として手術を受ける事が多いと云つてゐる。

これに就てセルギーは、其れは女性が諦めるといふ事に於て男性よりも勝つてゐるからだ、何となれば、女性が女性よりも大きな意志を持つてゐようとは殆ど思はれないからであると云つてゐる。尙、セルギーは家族に病人が出來てこれを看病する時、男は迅速に肉と健康とを失つて行くのに反し、女は却つて元氣と食慾とを保つて行く事が屢々であると云つてゐる。此の邊から考へても結局看護人は女に限るものかも知

れない。

苦痛に對して耐忍する事の强い女性は、傷害に對しても又男性より强い。よく殺人事件などで一太刀浴せられて直ぐ卒倒するのは男性だが、女性は加害者の睾丸に武者振りついたりしてなかなか往生しないものである。さればこそ昔から女は執念深いものとされ、蛇や猫に譬へられてゐるのである。

女性の心理的特徴

女の執念深いといふ事を云つたから、序でに女性の慘虐性に就て一言して置く。

一體、女性は非常に慘虐性に富んでゐるとのである。たゝ女性が優しく溫和に見えるのは長い間の男性の力に壓迫された結果で、一面は男性を怖れ、一面には男性に媚びる爲め、殊更裝ふ——自覺的に或は無自覺的に——保護色であつて、實は女性程殘

忍な性質を持つてゐるものは無いのである。これは兩性の兒童時代を見ても解る、『意地わり根性尻曲り』なるものは多く女兒で、男兒は喧嘩をしても薩張りしてゐるが、女兒は大きな聲で吐鳴つたり、格闘に及んだりしない代りに、何處何處までも敵をいぢめようとする傾向がある。そして『いゝ氣味だ』といふ事をいふ。これは敵の苦しむのを見て痛快がる一種の慘虐性の現はれである。男兒には元來慘虐性が少いから直ぐ敵に同情して了ふ。一たん撲つた敵も直ぐ可哀想になつて講和する。併し女兒はなかなか講和しない。たとひ表面は講和しても腹の中では何處までも敵を憎でゐる。そして表面仲よくしてゐる敵が何か失敗するとか苦むとかすると、表には非常に同情したやうな事を云つたり、一緒に泣いたりしながら、腹の奥底では殆ど本能的に『いゝ氣味だ』と思つてゐるのである。

彼の貰ひ子殺しの如きは到底男性には出來る行爲でない。あれなどは女性專門の罪惡である。女の慘虐性は男性に壓迫せられてゐる爲めに生じた一種の潜在性反抗心である。故に何かの機會があると、其れが一時に現れて、到底男性などの眞似の出來ないやうな慘虐をやるのである。此の稿を起した最初の日であつたか、下關の某銀行支店長の夫人が幼女虐待をしたといふ記事が新聞に出てゐたが、あれなども正しく女性慘忍性の發露である。

女性の慘虐性は特に多數群集する事によつて現はれる。過般富山地方に起つた米騒動の口火の如きも正しく其の現はれである。古代アイベア人がカルタゴ及び羅馬人に對する戰ひの時、其の市街戰に多數の女性が參加して、過般のバルチザン以上の殘忍を恣にし、屍の山を築いたのや、西班牙に於けるナポレオン侵冠時代時にサラゴザ包圍に於けるが如き、何れも女性慘忍性の現はれである。故に女性の慘忍性は隔生遺傳的に現はれるものであるといふ說がある。

若し、吾人男性の勢力が失墜して、女性が勢力を得るやうな世の中になつたとしたら、女性は何んな慘虐を恣にして、吾人を苛酷に取扱ふか知れない。此の意味から云つても、女性に男性同様の權利を與へるのは危險であるといふ議論がある。これは全然空論ではなく、一面確かに眞理を含んでゐる。併し女性は然うした慘虐性がある と同時に、同情心のある事も見逃してはならない。

女性の同情心は其の母たる事によつて起るものである。常に弱いものを憐むのである。云ひ換れば、女は弱きが故に弱い者を憐み同情するのである。老人、小兒、貧民、病者、孤獨者、囚虜何れも女性の同情を喚起するに足る。

併し女の同情にも一種の病的なのがある。ヒステリー性亢奮の結果一時的に同情するのや、自ら無爲無聊を慰め人爲めに同情するのや、虛榮の爲めに同情するのや、カラ騷ぎをする爲め（女性には男性以上にお祭り騷ぎを好む特質がある）同情するのは

何れも一種の病的同情である。レグランド・ド・ザヴルレは其の著書に、『これ等の婦人は虛飾と自慢とに滿ちた同情をなすもので、彼等は恰も利益配當金分配の確實なる企業に投資するが如き熱心を示して一種の病的同情をなすものである。』と云つてゐる、花の日會とか何々慈善會とか何々バザーなどと稱するものは、多く此類である。

若し女性は同情あるものか、慘虐なものかといふ問題を提出せられたならば、吾人は直ちに女性には慘虐と同情と二つの心が相並んでゐると答へる。

女は弱きが故に同情し、弱きが故に殘忍なのである。又、慘忍なるが故に同情し、同情するが故に慘忍なのである。即ち女は弱きが故に慘忍といふ武器を有し、弱きが故に同情といふ城廓を持つてゐるのである。慘忍といふ武器を以て敵を苦しめ、同情といふ城に籠つて自ら慰めるのである。

女性の有する慘虐性が文明の進歩と共に漸次覆はれて行くのは、これ又敎育と遺傳

のお影である。併し其の始めは男性を怖れ、男性に媚びするを得ぬ境遇から發したものである事は、野蠻人や米開人の女性を見れば解る事である。

女性の精神的能力

プルダッハが女性を評して左の如く云つてゐる。

女性は語學、歴史、博物等に從事せしめると、時に卓拔な才幹を示すもので、數字の如きも其の運用が一定の範式内に止まつてゐる時は優秀なる學才を現はす。併し女性の精神は常に自働的能力に乏しいものであるが故に、其の想像力は活潑であるが、たゞ事物を再製するに止まる。これに反して男子の精神は常に强健で創始力に富んでゐる。そして男子の間には此の精神力の高下優劣の差が產だ著しいが、女性間には劃合に著しい差異がない。

女性の精神は創始力が甚だ貧弱であるが故に、新たに研鑽の針路を開いて學術の奥を探究するが如き事なく、又自ら發明するが如き能力もない。古來婦人にして大發見をしたものなく、美術上の大作を出したものもない。花鳥風月や省像畫を描く事は巧みなものはあるが、眞に藝術上の大創作を出したものがない。小細工の巧みな者はあるが、彫刻上の傑作を遺したものがない。器用な文章は書くが悲劇や史詩に巧みなものが無い。音樂家は多いが、歌詞作曲に秀れたものがない。

ビショッフも可なり女性を罵つてゐる。

女性は溫雅、從順、親切で饒舌で且つ狡猾である。男性は勇猛、果敢、粗傲、沈毅である。女性の心は變り易く、前後矛盾せる事多く。萬事感情によつて支配せられ、男性は理性によつて其の感情を制御するを以て、其の心術堅固にして其の行動常に條理井然たるものがある。そして古來學術及び藝術上に於ける進歩又は發明の女性に

よつて爲されたるものなく、女性の口によつて眞理の道破せられた事がない。

ワルダイエルも古來巾幗者流にして學術技藝の諸方面に於て名を上げ功績を殘した者も多くあるが、未だ曾て男子のなせる如き高遠雄大の域に至れる者は一人もない。これ全く婦人の天性の然らしむる處てあると云つてゐる。

ジエー・ジエー・ルッソーは婦人は一般に藝術を愛する事無く又これを解しない。即ちこれに對する天才が無いのである。人の心情を溫め、或ひは其の靈を燃すが如き辭句、心神を蕩盡するが如き天才、熱烈火の如き能辯、人の心胸を扶つて祕線に觸るゝが如き大歡喜は、女性の文章に認める事は出來ないと云つてゐる。

女性は既に他人が受けて入れてゐた說、又は外見上尤もらしい說を受け入れる事は男性よりも早いが、他人の採らない說を自分のみが採つて行くといふやうな事は男性より弱い。世間の人が何と云はうが、飽くまで自分の目的に向つて進み、遂に立派

なものを造り出すといふやうな忍耐は到底男性には見出し得ない。つまり複製はし得るが、創作は出來ないのである。

況んや抽象的な知的な目的の爲めに、世間の侮蔑を意とせず、何處〳〵までも進んで行くといふやうな女性は尙々無い。ワイストも釋迦も日蓮もソクラテスもアリストトルもフラトーもマホメットもニイチエもトルストイも皆男性てある。

女性は男性のやうに獨立心が無い。イブセンの「人民の敵」の主人公が、世界に於て最も强い人間は最も孤立し得る人間だ」と云つてゐるが、斯ういふ人間を女と呼ぶ事は六ケ敷い。男性が若し全身痲痺に罹ると、非常に尊大になり、自己を信賴して行くやうになるものてあるが、女性が若し此の病に罹ると、自信に富んだ自尊心を現はすのてなく、極端な虛榮心を現はす。此の病は男性でも女性でも常に心の奧に潛在してゐる處のものを解放して自由に表面に現はさせるものてある。即ち男性には獨立心

が潜んでゐるから其れが現はれ、女性には虚榮心が潜んでゐるから其れが現はれるのである。

女性は眼前の事物に動かされ、遠く離れた事柄を顧みない傾きがある。斯ういふ傾向は凡てのものを深く廣く考へて覓ねばならない哲學的思想などには禍である。哲學や宗教や文學や美術などに一流の女性が出來ないのは恐らく茲らから來てゐるのではあるまいか。

兩性の疾病率

獨逸聯邦バイエル王國内の病院で調査して男女兩性の患者數及び病疾の種類は左表の通りである。

病名	男性患者數	女性患者數	病名	男性患者數	女性患者數
惡性腫瘍	二七三	三三四	腸溢血	八四	八四
窒扶斯	三六〇	三二八	肺炎肋膜炎	九二九	三六八
結核病	二二七	一〇六	心臟疾患	五二一	四一四
腸腹炎	六一	二九	腹膜炎	一〇二	一三四
肝臟、脾臟疾患	一四四	九六	骨及關節疾患	七五三	五七三
腎臟炎	二一〇	一〇六	骨折	六一五	一〇九

又、獨逸に於ける大病院の患者數比例に就て左の如き統計がある。

病院名及年次	男性患者數	女性患者數	病院名及年次	男性患者數	女性患者數
伯林慈善病院（一八七五年）	八、一〇〇	五、六五二	維那ルートルフスヂフツン病院（一八六五—七五年）	一二、四〇九	六、五四四
維那一般病院（一八五五—七五年）	六三、一四六	三八、二六五	維那慈善病院（一八七五年）	八、三四六	五、八〇三
維那ヴイテネル病院（一八五五—七五年）	一八、六五二	一四、八五二	計	一〇五、五三三	六一、一五八

斯くの如く男女性患者數の間に大差がある。男女性罹病率の關係は其の國民の文化

の程度、社會組織の狀態等に就て考へて見なければならぬ。たゞ病院の患者數のみを見て、直ちに男女性の罹病率であるとはされまい。

男性は常に外出勝ちであるから、容易に病院を訪ふ事が出來るが、女性は常に家庭にあつて家事を執つてゐる爲め、簡單に病院へ診察を乞ひに行く事が出來ない。これは日本も獨逸も同じ事である。故に病院に於ける患者數のみをもつて、直ちに男女兩性の疾病を判斷する事は出來ないのである。

一般に女性は男性に比して心臟、循環器系疾患、血液諸病、胃腸病等に侵される事が多いといふ說がある。女性は分娩、產褥及び姙娠に際してこれ等の機關に多大の影響を蒙るものであるから、此の說は全く根據の無いものではない。明治四十一年及び四十二年に於ける全國死亡數中から、各疾病に就て男女兩性の死亡原因を比較して見ると次ぎの通りである。

疾病	四十一年男性	四十一年女性	四十二年男性	四十二年女性
癌腫其他ノ惡性腫瘍	一四、四一一	一四、〇四〇	一六、六〇二	一五、九四一
腸窒扶斯	三、二九七	二、六七七	三、二二〇	二、八〇四
肺結核	三六、三七五	三九、一六九	四〇、二六〇	四二、三六三
結核性腦膜炎、腸結核其他臟器ノ結核	八、七七七	一二、二五八	一二、八三八	一八、一六一
腦膜炎	三六、〇五二	三三、〇六五	三七、六〇五	三五、四二八
腦溢血、腦充血、軟化	四二、六一〇	三五、九七〇	三五、六五三	三〇、一四五
肺炎、氣管枝炎	三三、一四九	二九、四二六	三七、一六六	三三、五一〇

疾病	四十一年男性	四十一年女性	四十二年男性	四十二年女性
心臟ノ機質的疾患	一三、四六六	一五、一八九	一五、四七〇	一六、五九一
腹膜炎	一二、二三一	一二、二九四	九、〇六〇	九、二二七
肝臟硬化	一、八六一	九九三	二、〇七〇	一、一〇一
腎臟病	一一、〇二五	一一、五五七	一三、一〇一	一三、八八〇
胃ノ疾患	六四、五七二	六九、〇六五	七七、八一九	八二、八九〇
下痢腸炎	六、一〇五	二、六六二	一〇、三七八	四、七〇七
脚氣	三、四八七	一、八四三	一三、四四八	七、六七〇
外傷				

これによつて、女性は男性に比し肺結核及び結核諸病、心臓病、腎臓病　腹膜炎、胃腸病によつて死する者が多く、肝臓硬化、脚氣によつて死する者が遙かに少い。脚氣の男性に多く女性に少いのは原因不明であるが、肝臓硬化の男性に多いのは、男性は女性に比して飲酒、努力等誘因となるべき機會を多く作るからである。外傷の男性に多くして女性に少いのは職業や境遇による事は云ふまでもない。

獨逸バイエル王國内に於ける病院の調査と、我が國に於ける前記の統計とを比較して見ると、彼れにあつては惡性腫瘍が女性に多いにもかゝはらず、我が國にあつては却つて稍や男性に多い。これに就ては一概に斷ずる事は出來ないが、惡性腫瘍は婦人の生殖器に發する事の多い疾患であるのに、我が國に於ては婦人科學的知識が一般醫師に洽ねからざる爲めに、或は生殖器の惡性腫瘍を發見する事が少いのではあるまいか。又、我が國に於ては男性よりも女性の方が結核諸病に罹る者が多く、獨逸に於ては男性の方が多いのは、彼我の生活程度、家庭に於ける衛生狀態、職業の差異等によるものであるとしなければならぬ。

花柳病に就て男女兩性罹病率を知らうとする事は頗る困難である。此の種の疾病は隱蔽せらるゝ事多く、病院に於ける患者數などは到底當てにならない。たゞ栗本醫學士が其の著書に斯ういふ事を云つてゐる。『田舍に於ては(花柳病は)女一人に對して男六・三、都會に於ては女一人に對して男三・六である。故に全國を平均すれば女一人に男四・一である。即ち換言すれば、一人の女は四人の男の傳染源となるのである。故に男子をして云はしむれば女は罪深いものである。女一人にて男四人を降服せしむると云ふ譯なるも、併しこれ獨り女の罪ではない。元を糺せば男の罪即ち結婚の時傳染せしむるといふ動機は主として男の方にある』云々。

兩性の死亡率

男性は女性に比較して死亡率が高い。其れは戰爭と危險なる職業との爲めであると、以前は思はれてゐた。併しこれのみが男性の死亡率の高い原因とはされない。

青年時代及び壯年時代には戰爭と職業との影響を受けるが、歐米に於て男性の死亡率の高いのは寧ろ小兒期と老人期とである。ベルティヨンは產兒に於る男女の死亡率の比例を女兒一〇〇に對して男兒一〇六・六であると云つてゐる。其の他の人の統計によると、第三年目から第十五年目に至る間は死亡率の上に男女性の相違を認められないが、第十五年目から第二十年目に至る間には女性の死亡率が男性の死亡率よりも高い。これは女性の爲めに特別な危險期であるからで、第三十年目から第三十五年後になつて行くと、漸次女性の死亡率が低くなり男性の其れの方が高くなつて行く。そし

て英國では男女の差を差引いて殘つた女の數の五分の四は寡婦である。

老人期に至るにつれて女性の數は次第に男性に優つて行く。ハンフリーが調べた百歲の人々の中には男性は僅かに十六人に過ぎなかつたが、女性は三十六人あつたといふ英國政府の統計によれば、百歲以上で死んだと思はれる人々の中に男性はたつた僅かしかなく、一八九一年に八十五歲以上で死んだ男性五千三百二十人に對し、女性は八千二百九十一人、七十五歲から八十五歲の間に死んだ男性二萬四千二百六人に對し女性は二萬七百八十五人ある。

吾國に於ける男女の死亡率を見るに、滿一年以下に於ては、男兒の死亡率は遙かに女兒の上に出てゝ居る。即ち人口百に付き滿一年以內に於ける小兒の死亡率は、

男兒	二五、五八	女兒	二二、四五

滿一年乃至五年の男女兒の死亡率は(人口百に對し)

男兒　三七、〇九　　女兒　三四、〇八

滿五年より十年に至つては、

男兒　三、〇三　　女兒　三、一八

となり、女兒の死亡すること却つて男兒よりも多くなる。尙滿十年以上に至つては、

年齢	男性死亡率	女性死亡率	年齢	男性死亡率	女性死亡率
十歲乃至十五歲	一、六七	二、四一	三十歲乃至六十歲	二一、三七	一九、六七
十五歲乃至三十歲	三、〇五	四、〇一			

となる。これに依つて見れば、吾國に於ける男性の死亡率は、男性固有の職業に從事すべき年齢、即ち所謂働き盛りの時代に於て女性よりも高いものになつてゐる事が知られる。

近年の統計を見ると、女性の自殺者が年々增加して行く事が解る。自殺の衝動は必ずしも病的であるとは云へないが、大概は精神に異常を――たとひ一時にしても――

來たした者が多い。自殺は落着いて熟考した上で行はれる事は稀れである。

自殺の多い少いは自然の現象に影響される事が多い。精神病と同樣自殺の最も多いのは夏の暑さの始めである。そして田舍よりも都會が多く、農業地よりも工業地が多い。軍人や水夫などは其の他の種類の人々より多く、高等敎育を要する職業の人は其の他の職業の人々より多く、全く職業を持たない人は更らに多い。

男性にしても女性にしても未婚者は既婚者よりも多く自殺する。既婚者が子供を有する時には更らに少い。又、配偶者を失つたものは男女兩性とも同年輩の有配者より二倍の自殺者を出す。そして配偶者を失つた人は其の年齢が進めば進むほど自殺の傾向が著しくなる。一般に老人は靑年よりも遙かに多く自殺する。

以上、吾人は大體ながら男女兩性の第二性的特質に就て研究した。これを要するにショッペンハウエルが『男子の理性と智惠は廿八歳までに漸次圓滿なる發達を遂げるが、女子は十八歳で早や既に成熟期に達する。故に女子は十八歳だけの理性と智惠とを有するが其れ以上に達する事は出來ない、女子は一生涯子供である。』と云つたのは蓋し穿つた言で、正に其の通りである。

實際女性は早熟である。成長が迅速なだけ、其れだけ生成の停止することも早い。其れに反して男性は女性に比して稍や發育が鈍いが、又其れだけ發育して行く時間も長い。そして三十歳四十歳に及んでも、猶發達すべきものは發達は持續する。これ男性が何事にも女性に勝る所以である。

女性は概して男子に比して知識が少い。併し知識の概念を組織する本線としての五官的感覺を觀察するならば男子よりも超越した處がある。又これ等の感覺を調和したり融合したりする腦の働きが鈍いかといふに、決して然うとばかりも云へない。記憶力などは寧ろ男性に優らうとも劣つてはゐない。併し女性は一般に推理力が劣つはゐる。これは如何なる方面から觀察して見ても正に其の通りである。併し、これも絶對的の議論ではない。今日までの女性の境遇や教育が女子の能力を屈束し、推理出來ないのでなく、推理させなかつたのらしい。それが段々女性本來の推理力を減殺して行つて遂に今日のやうな狀態にして了つたらしい。

其れと同じやうに、女性の肉體や精神が男性よりも劣弱であるのは、長い間の社會的境遇や男子の壓迫から來た結果らしい。果して然うだとすれば、今後女性の社會的待遇や教育其の宜しきに適へば、爾今何百何千年の後には或は、女性の心身が男性同

様に發達して、スペンサーやショッペンハウエルが『女子は發達しない男子だ』とか『女子は子供だ』とか考へたのは、文明史上の一引例に過ぎないやうになるかも知れない。

第四章　性交傳染病

第一節　淋　疾

淋疾は如何にして感染するか

淋疾は淋菌と稱する微菌に因つて起る疾病であつて、多くは花柳の巷に遊び淋疾を有する不潔な娼婦と交媾する事に因つて感染し發病するものである。併し元來微菌の浸入によつて起る疾病であるから、必ずしも交媾によつてのみ起ると限るものでなく時として淋疾患者の用ひた手拭とか或は其他の器具に因つて媒介傳染されるとか、或は浴場などで淋疾患者の分泌物が局部に附着して感染すると云ふ樣な場合もないではない。交媾することのない小兒に時として小兒淋を發見するのは此の事實を證明する

ものであつて、つまり母の淋疾が手或は其他の媒介により感染するとか、或は全く他の者の淋疾の分泌物が附着して感染したものである。吾國に於いては女兒が浴場に於て、兩脚を開き會陰部をピタトと浴場の床の上につけて座る習慣があるのは、斯うした傳染を、易しからしむる。淋疾は始め尿道の粘膜に限局するものでなるけれども、多くは續發的に隣接した他の臓器例へば攝護腺、輸精管、精嚢、時として副睾丸、女子に於いては膣、子宮、輸卵管、卵巣等を犯すものであつて、一方には病毒の轉移により關節、腱鞘、腎臓、心臓を侵すことが屢々ある。其他病毒が眼内に入る時は化膿性結膜炎、俗に言ふ風眼と云ふのを起し甚しい時は失明に至ることがある。

淋菌とは如何なるものか

淋病の原因である淋菌は西暦一千八百七十九年に獨逸のナイセル氏によりて發見せ

られた長さ一・二五ミクロン幅〇・七ミクロンの球菌であつて、其の形は珈琲豆を二つ併列したやうに併んで居る。それ故重複球菌と言ふのである。急性淋疾患者の膿を取つて塗抹標本を作りレッフレル氏液で染色して顕微鏡下に檢する時は、其中に淋菌、卽ちゴノコシケンを見ることが出來る。

淋肉の生育には體溫卽ち攝氏三十七度の溫度を適當とする。併しながら僅少の時間之れよりも底き溫度若くは高き溫度を觸れしめても、甚しき害なく之に堪えしむることが出來る。然し乾燥に對する影響は鋭敏であつて、僅に數時間の乾燥後には淋菌は唯僅かに發育し二十四時間の乾燥後には一般に發育を認めない。此事は久時乾燥された分泌物、例へば衣服夜具等に附着し、若しくは塵埃と混じた淋疾患者の分泌物の如きものが早く傳染力を失ふ事の經驗に一致するものである。之に反して濕潤を保たれたる淋菌はスタインシエナイテル及びシュクフエル氏等の試驗に依つて示されたる如

く、從來人の信じたよりも其抵抗力の甚だ強いものであつて、蒸餾水中に於いても亦淋菌は數時間其生活を保つものであると云ふ。

急性淋疾の症候と療法

淋菌が尿道内に入る時は、三日乃至五日を過ぎて淋疾の徴候を發する。而して未だ徴候を表はさぬ時期を潜伏期と云ふのであつて、潜伏期は前記の如く三日乃至五日であるけれども、往々例外として早きは一日、遅きは一ケ月に亘ることもある。急性淋疾は其の侵されたる炎症の區域に依つて急性前部尿道炎、急性前後部尿道炎との二つに分けることが出來る。

急性前部尿道炎の症候潜伏期を經過した後、前驅期に移す自覺的即ち患者自身に感ずる症候としては尿道口に輕度の搔痒及び熱灼の感を覺え、他覺的即ち醫師が知ることに依る症候としては、其部が發赤し、且つ稍腫張して膠樣物にて粘着する。此の前驅期は二日間位で終り、之を過ぐれば旺盛期となつて分泌物は增加し其性質も亦粘液性から漸次濃稠な膿性となつて、是を取つて顯微鏡下に檢すれば多數の膿球即ち白血球の變化したものと淋菌とを認むることが出來る。此際膿球の粒が大きく、且つ淋菌が膿球の内に存在するのは急性淋疾の重なる症狀であつて、つまり感染後未だ長く經過しないと云ふ證據である。

斯くて炎症が前部尿道全體に及べば、前部尿道全體の粘膜は發赤腫張を來し漸次熱灼及び疼痛を加へ、殊に放尿の際に於ける疼痛が甚だしく、尿線は細小となつて時には點滴狀或は斷續を呈し、尚夜間勃起し或は遺精等の際に疼痛甚だしく遂に不眠を來すことがある。そして約三週間を持續すれば疲勞は極度に達し、屢々包皮の浮腫及び急性淋巴管炎を發し其の部の腫張と疼痛とを訴ふるに至ることが屢々ある。且つ輕

度の發熱並びに多少の倦怠、食思不振、精神鬱憂等を伴ふことがあるけれども、三週の半ば或は終り頃から自覺症狀が漸次減弱し、分泌物も亦減少し且つ粘液性となる。此の時期は治癒期と云つて再後二三週間で炎症は鎮靜するに至るのであるが、患者の攝生の宜敷くない場合、即ち安靜を守らずして劇動し、或は飲酒、交接、遺精並びに香味料等を攝取することに依つて一旦治癒期に入つたものが再び旺盛期の症狀に變ずることが尠くない。

急性淋疾にも尙ほ此他過急性と亞急性との二つがある。過急性と云ふものは前驅期短く諸症狀劇烈であつて膿樣分泌物多く且つ屢々血液を混じて褐赤色を帶び、尙ほ包皮は浮腫狀を呈して淋巴管炎を起して全身症狀の重いものである。亞急性と云ふのは炎衝、疼痛、全身症狀等總て輕微であるけれども、而も往々重症に變ずることがあり、殊に後部尿道に波及することが多い。

急性後部尿道炎の症候、本症は前部尿道の炎症が遂に尿道括約筋を越えて後部尿道に波及して全部の尿道粘膜を侵すものを云ふ。そして本症は前部尿道炎の將に治癒期に入らんとする時期即ち二週の終りから三週の初めに多く發するもので此際前部尿道炎は俄かに其勢力を減殺するものである。

後部尿道炎の特徵と言ふのは尿意の頻數なことであつて、患者は一時間乃至二時間の間隔を置いて尿意を催し、疾病が强烈になれば夜間絕えず尿意を催し終夜睡眠することが出來ない。尿意頻數となれば之れに伴つて疼痛も一層激しくなり、放尿の際に特に激しく且つ往々痙攣狀となれば患者は遂に放尿を恐るゝに至る樣なことがある。又膀胱頸が侵さるゝ時は尿意を催すと共に激痛を伴ひ、放尿後に於いて血液の點滴を來すことがある。强烈な急性前部尿道炎に於いても屢々尿中に血液を混ずることがあるけれども、放尿後に血液の點滴するもの即ち終期血尿は急性後部尿道炎並びに膀胱

頸の疾患に就てのみ見る特異なものである。尙ほ此他後部尿道炎の自覺症狀としては生殖器刺戟症狀即ち遺精、射精後並びに放尿後に於いて肛門部に放散する會陰部の疼痛である。後部尿道炎にも急性の他に過急性及び亞急性の二つがある。一亞急性の症狀は甚しくなく緩慢であつて膿を漏らすこと少く、急性は分泌多量であつて、症狀も前者に比して激しく疼痛及び輕度の熱發がある。過急性は其分泌物膿汁樣であつて其量も亦夥しく尿意頻數及び終期血尿があり、全身症狀も亦甚だしいのである。

無刺戟性急性淋疾。急性淋疾であつて往々以上の樣に刺戟症狀を缺くものである此の無刺戟性の者は曾て一度び淋疾に罹つたことのあるものに多く、無刺戟性の淋疾は病勢極めて微弱であるから患者は全く淋疾に罹つたことを知らずして經過し、偶然に之を發見するか、或は病勢增惡したかに依つて是を發見することは屢々あることである。淋疾に罹つたことが無いと稱するもので尿中に淋糸其他の分泌物を發見する者のあるのは、實際に於いて淋疾に罹つたことが無いのではなくて、其の刺戟症狀を缺いたものである。此の無刺戟性に急性淋疾を經過した患者の例は、著者の診療所(神田區今川小路二丁目十二番地)に於いて見受くる事決して尠くないのである。或は又生殖器神經衰弱患者であつて、淋疾に罹つた事がないと云ふものゝ中にも、其神經衰弱は慢性淋疾に原因して居るものであることをブージーの使用によつて確定さるゝものが甚だ尠くない。是等は皆無刺戟性に不識の間に淋疾を經過したものである。

淋疾の診斷。尿道に分泌物があれば、果して淋疾であるか否かを確實にするために是を顯微鏡で檢査せねばならぬ。急性淋疾に於いては、尿道から出る膿樣分泌物を取つて檢する時は、多くは淋菌を認むるものであつて、淋菌は最初膿球外に獨立して存在するけれども、漸次其内部に侵入し粒の周圍に占居するに至りて、原形質及び核は次第に侵食されて遂に膿球は破壞して細胞の形を失ひ、淋菌は再び獨立して存在する

に至るものである。然し數回殺菌劑を尿道に注入した者に於いては淋菌を發見し得ぬものが屢々ある。斯の如き場合は淋菌の存在を發見することは出來なくとも、膿球の核が鮮かに染色されてある場合には、淋菌の存在する證である。

斯樣にして其淋疾なることを確め得たならば、更に進んで前部尿道炎であるか、或は後部尿道まで波及して居るかを判定せねばならぬ。是にはトムプソン氏の二器試驗法を行ふのであつて、全尿を二個の硝子製コップに分けて放尿し、是を檢するに尿道炎が前部だけてあるならば初めのコップの尿だけ溷濁し、之に反して後部尿道の侵された場合には初めのコップは勿論溷濁し、後のコップも稍溷濁するのである。

急性淋疾の豫後。 淋疾の治療は頗る困難の者であつて、專門の醫師でさへ常に苦心するところである。炎症即ち疼痛や排膿は患者自身が攝生を嚴にして身體の安靜水治法等を行ひ、且つ適當の治療を加へれば數週間で炎症は鎮靜するけれども、淋疾は必ず尿道及び攝護腺に浸潤と云つて病氣の巣を作つて永く殘るものであるから、患者が若し治療を忽諸に附すれば、其結果屢々副睪丸炎、或は膀胱炎などを續發する斯く淋疾は必ず浸潤を形成するもので急性のみて治癒するは殆んどなく、必ず慢性に移行して若し之に對して根治法を行はなければ終生治癒することがない。斯淋疾の殆んど凡てが慢性に移行して病巣即ち浸潤を形成するものであつて、只炎症が鎮靜したに過ぎないのである。余の診療所に來る患者でも、他の醫師が治癒したとの診斷を下せるに拘はらず此の浸潤が立派に存在して居るものが甚だ多い。

急性淋疾の療法。 急性淋疾の療法は局所療法、藥物の內用による療法、及び攝生法の三つに分ける。

一、局所療法。從來行はれた主なる急性淋疾の局所療法としては、ナイセル氏は其早期に三千倍乃至一千倍の硝酸銀水の注入を賞用し、デスノ氏は最初二萬倍昇汞水を

以つて前部尿道を洗滌し、次で一萬五千倍の昇汞水を用ひ漸次濃厚度を増すべしと稱し、リコルド氏は三千倍の硝酸銀水を餘り壓力を加へずして尿道内に注入し、一二分間尿道内に保留して放出し、然る後に一%の食鹽水にて洗滌する方法を採り、又ジャネー氏は過マンガン酸加里溶液にて洗滌する方法を良とし、ケステル氏は一乃至五%のイヒチオール水を注入することを賞用した。急性淋疾の外用藥は多く硝酸銀を用ひたけれども、近時銀の蛋白化合物、即ちプロタルゴール、アルバルギン等が用ひらる。併しながら是等の銀劑は多くの醫師によつて濫用せられ、弊害を來すことが甚だ多い。

二、内服療法。内用藥は其の内用した藥物が吸收せられて、大部分が尿中に排泄し放尿の際に尿道に作用して尿道粘膜の炎症を鎮靜せしむる作用がある。併し藥物の内用のみでは決して淋疾は根治するものでない。併し根治療法を行ふ際に補助藥として用ひるは最も必要なことである。其主要なるものとしては骨拜波板爾撒謨、白檀油等である。

三、攝生法。患者は專門の醫師に由つて充分なる治療を受くることの必要は勿論であるが、患者自身の攝生を守ることは治療の成績に頗る影響するものである。攝生法としては、

イ、安靜。急性淋疾殊に前部尿道炎に於いては絶對的に安靜を守らねばならぬ。然し絶對安靜が事情の許さない場合にも、疾走、體操、狩獵、騎馬、遠足、自轉車、旅行等は禁せねばならぬ。勃起及び遺精は病勢を增惡せしめて有害であるから之を妨止するために便通を整理し、夜具は餘り柔かならざるものを選び、其他淫猥な談話、小說、繪畫等春情を發動せしむるものは避くを要す。

交接は極めて有害であるから淋疾の早期後期に拘はらず之を禁止する必要がある。

ロ、食餌　食餌に就いても充分注意せねばならぬ。刺戟性の食物、例へば香味料として用ひらるゝ山葵、辛し、胡椒等及び炭酸水を含むだ清涼飲料水例へばサイダーの様なもの及び酒類は清酒とビールとに拘はらず絶對的に避けねばならぬ。又本症の特異として直腸中に固形の糞塊を充塡する時は刺戟を生殖器に及ぼして炎症を増惡せしむる傾向があるから、食餌療法をする傍ら時々下劑を用ふることが極めて必要である。

急性淋疾に於いても淋菌ワクチンの注射は極めて必要である。余の診療所（東京神田今川小路二の十二）で急性患者にワクチンを用ひた結果を見ると、浸潤の出來方が少ない。

慢性淋疾の病理

慢性淋疾は通常臨床上急性淋の末期と異るところがない。尿道からの分泌物は或は若干存在して尿道口から漏るゝこともあり、或は極めて僅かに存在して尿をコップに採取して檢査して初めて認めらるゝこともある。此際認めらるゝ分泌物は絮糸の形をなして二器試驗に際して第一のコップに認めらるゝが、時として第二のコップにも存在することがある。

さも〳〵慢性淋疾と云ふのは如何なる者を云ふのであるか、此の事に就いては一般の素人は勿論醫師でも可成誤つた見解を有して居る者が尠くない、否普通の醫師は勿論專門と稱する醫師でも誤つた考へを持つて居るものが尠くないのである。即ち一般には慢性淋と云ふのは淋疾が度々反覆して傳染したか、或は一度傳染した淋疾が反覆排膿しておる樣なものゝみを慢性淋と稱し急性淋疾が良好に經過して暫時にして膿が出なくなつたものに就いては最早淋疾は治癒したものと考へて居るが然し之れは非常な間違なのである。即ち淋疾と云ふものは一旦之れに感染すると其の症狀の輕重に拘、

はらず、排膿の時期の長短又は反覆するや否やに拘はらず必ず病原菌は尿道の粘膜或は隣接臓器の攝護腺等に浸潤と云ふ所謂病氣の巣を造つて必ず長く其處に黴菌は存在して居るものである。元來尿道の壁には小さな腺即ち尿道の分泌物を出す腺が澤山ある、菌は此の腺の中に奥深く入り込んで此處に浸潤と云ふものを作るのである。即ち浸潤は結締細胞が集まつて浸潤を作り黴菌は其中に入つて何時までも存在するのである。それ故淋疾に一旦罹る時は此の浸潤は必ず出來るので膿が止まり痛みが無くなり尿は透明になつても尿道には此の浸潤があるから其の浸潤から出る淋糸と云ふ膿の固まつたものが長く尿の中へ現はれるのである。其故淋疾は急性だけでは決して治癒するものでなく必ず浸潤を作り即ち慢性となるものである。それ故淋疾に罹つたならば必ず慢性の治療を行つて此の浸潤をも悉く取る樣にせねばならないのである。浸潤は尿道の分泌腺の中へ作るのみでなく粘膜の直下にも造るので是れを粘膜下浸潤と云ふ。其の他攝護腺にも同じ樣な浸潤を必ず作るものである。尿道の浸潤が高度になつて來るに從ひ結締菌の增殖が甚しくなつて尿道の內容が狹くなつたのが尿道狹窄である。尿道狹窄と云ふのは斯うして出來るのである。若し其の浸潤の比較的軟いものを軟性浸潤と云ふのである。度々繰返して言ふやうであるが此の浸潤がある間は淋疾は治癒したものでなく、然も淋疾は必ず此の浸潤を作るものであるから淋疾と云ふものは此の意味に於いて急性淋疾だけの物はない悉く慢性の疾患であると云ひ得る。淋疾が急性だけで治癒すると思ふのは全く誤つた考へである。尙ほ此の浸潤は多く尿道の後部に作るものであるがそれは必ずしも後部尿道炎を起さないでも此の浸潤は後部に作るものである。それは即ち尿道の表面を傳つて菌が前後部尿道間の括約筋を開いて行かなくとも、菌は淋巴道を經ていくらでも後部に行き得るものである。それ故たとひ尿道の炎症が前部尿道にのみ局限さるゝとても後部尿道に於いては必ず浸潤を作つ

て居るものである。此の病理の充分知られて居ない醫師が決して尠くない。斯の如き醫師は決して淋疾を全治し得るものでないのである。

慢性淋疾も急性淋疾の樣に前部尿道炎、後部尿道炎及び全部尿道炎に區別することが出來るが、急性淋の樣に其の區別は明確でない。オーベルレンデル氏は尿道鏡檢査（尿道鏡とは電燈の光を以て尿道内を檢査する器械であつて、電燈を尿道の外に置く樣な構造のものと、尿道内に極めて少さき電燈を點火するものとの二種類ある）の結果、前部並びに後部尿道に軟性浸潤のあるものと硬性浸潤のあるものとに區別したが、此の内後者を更に其の浸潤の程度及び組織的構造に從つて更に腺性尿道炎と濾胞性尿道炎とに區別することが出來る。

慢性淋疾の症候

慢性前部尿道炎は通例輕微な自覺症狀があるに過ぎない、即ち患者は輕度の瘙痒若しくは灼熱の感があり、急性淋の樣に多量な膿を漏らす事はないが、朝起時に外尿道口より黄色、乳色、又は灰白色の分泌物を自然に漏らす事がある。又手指を以て尿道を壓する時、外尿道口より黄色若くは灰白色の分泌物を漏らす事がある。けれども其の分泌量極めて少ない時は外部に漏れ出づる事なく乾燥して尿道孔口唇が膠着するか或は又輕微な分泌物は僅に粘稠性を帶て之を形成する尿道部に止まつて、放尿の際に淋糸となつて尿中に混じ來るものである。そして淋糸は僅に分泌物即ち膿球が粘液に因て糸狀に集束するばかりでなく、又尿道上皮の剝離せるものをも含んでゐる。

慢性後部尿道炎は屢々前部尿道炎と同時に起る事あり、又其の多數の場合に於て攝護腺炎を併發するものである。そして攝護腺炎を伴なへる時は尿意頻數を起し、患者は常に膀胱に尿の充たされている樣な感じがある。其他又便通時に攝護腺部の壓重を

感じ射精後に於ては不快の感覺を覺え、夜間には遺精を頻發し患者を疲勞せしめ、便通時若くは排尿時に精液或は攝護腺液を漏す事がある。

慢性後部尿道炎は又神經系及び生殖器に障碍とを惹起する事がある。神經障碍中尿道及び其周圍に發する各種の知覺過敏症及び知覺異常症は特に注目すべきものであつて患者は會陰部に鈍壓を感ずるか又は尿道、股門及び陰囊に於て瘙痒を感じ、是と同時に後部尿道に灼熱の感を起す事がある。そして其灼熱の感は排尿に當つて著しく增加する。

慢性後部尿道炎及び攝護腺炎に因つて生殖器性神經衰弱を惹き起した時は、早漏及び快美感覺の減少を來し、尙屢々遺精、勃起不能等をも來す、けれども牛殖器性神經衰弱に關しては項を改めて說明する。

慢性淋疾の診斷

慢性淋疾の診斷には先づ尿を檢査する事が必要である、尿の檢査は淋糸が前部尿道より生せしか、或ひは又後部尿道より起るか確定するが必要の事である、そして前部及び後部の鑑別をなす爲めに尿を試驗器に採集する事に就ては最早急性淋疾に於て述べたれば茲には其一般の場合の說明を略す、けれども極めて乏しき分泌生產物ばかりを有する慢性淋疾にあつては、尿の檢査は極めて困難であつて、若し其他の症狀極めて少さい場合に於ては、尿道が其前部若くは後部の何れに於て病めるかの決定に苦しむ事は專門の醫師の間にも往々ある事である。こうゆう場合には出來うるだけ放尿を堪へ忍んで翌日の朝尿を檢査する事が必要である。

朝尿檢査の場合に於ても若し淋糸を見出さないとしても一回の檢査ばかり直ちに尿

中に淋糸ないものと斷定する事は早計である。故にこうゆう場合には尿の檢査を反覆繰返して檢査をして常に淋糸を認めぬ時は遂に初めて分泌生産が全く起らないものと見る事が出來る。それだのに一般の醫師（泌尿生殖器專門と稱する人の内にも）は多くは晝間の尿を檢して淋糸を認めなければ、それにて輕々に淋疾なきものと診斷を下す事が往々ある。まして是より更に進んで尿道内及び攝護腺の浸潤を確める樣な事をする醫師は極めて少ない。

尿の檢査は急性淋の項に於て述べたトムプソン氏の二器試驗法の外に、ヤダスソン氏の三器試驗及び灌注試驗法、マルソン氏の五器試驗法、ヤング氏七器試驗法があると云ふけれども此處には其の記述を省略する。

以上は尿の肉眼的檢査に就て述べたものであるが尿中分泌物の顯微鏡檢査に就て述ぶれば淋糸は主に膿球時に尿道上皮の剝離せるもの及び淋菌を認めるのがある。けれ

ども此際注意すべき事は、慢性淋にあつては尿中の分泌物を檢す毎に淋菌を見出し得るものではない、寧ろ淋菌を見出す事が少ない。ッヒール氏は八百二十人の患者中、八ヶ月乃至一年に至るとの八十四、三十八人中一年以上の者十八、四十五人中二年以上のもの二十回淋菌を發見したと報告してゐる、又ショルッ氏の說に從へば尿道淋疾は凡ての場合十分の一に於て淋菌を發見すると謂ひ、ブラウゼル氏は白血球を含める淋菌を有せる慢性尿道炎患者百六十三人中只僅に三人に於て淋菌を發見し、カスペル氏は慢性尿道炎患者百人中僅に八人、ヘルマン氏は三十四人中七人に於て淋菌を發見したに過ぎないと云つてゐる。斯く慢性淋疾に於て淋菌を發見する事が少ないにも拘はらず、尙傳染力を有しているそうであるのに一部の醫師の内には慢性淋疾患者の尿を檢査して淋菌を發見する事が出來なければ、それにて淋菌は全治するものと宣言を下す醫師がある、けれども是も亦誤れるものである。尿中の分泌物を顯微鏡にて檢し

て假令淋菌を證明する事が出來なくとも（以上既に述べた樣に淋菌を見出さない事の多いのは普通であるが）膿球が存在してしかも核が色素に對して鮮かに染色する以上は、急性淋の部に於て述べた樣に、淋菌の存在する事のシンボルをなすものである。（急性淋にあつては大核膿球であるけれども、慢性淋にあつては小核膿球となるものである）

又慢性淋疾は浸潤病竈（病氣の巣）を有するものである事は幾度も述べた如である。故に慢性淋の診斷には此の浸潤の有無を確める事が必要であるのに泌尿生殖器科專門或は花柳病專門と稱する醫師でも、此浸潤が何れの部位に發生するか、其大小及び硬軟の程度如何等に就て充分精細に診察をする人は甚だ稀てある。忌憚なく云へば今日尿道内の浸潤を確める事の出來る技倆のある專門の醫師は頗る少數で、他の多數の醫師は專門と標榜しながらも此の技倆をもつては居らぬ、そして此の浸潤を確めるには球頭「ブージー」を挿入して浸潤を搜る事、尿道計を用ひて尿道の擴張度を測定すること、尿道鏡を以て直接に尿道粘膜を檢査する事の内適宜の方法を選んで行はなければならぬ（時に其二種の方法を施す事もある）是等の方法は勿論專門的に教育を受け、且つ實地に就て充分熟練した醫師でなければ行ふ事は出來ない。素人の決して能すべき所のものではないから其詳しき方法は此處には省略する。

只最後に一言するは、慢性淋疾の診斷に浸潤を搜ることの重大であると同時に慢性淋疾の全治したか否かを確かめるにも亦此の浸潤の有無は最も重大に見るべきものである。

淋疾の全治せぬのは先にも云へる樣に浸潤を確め得る技倆のある醫師が尠くて、其の多くは輕々しく淋疾の全治する事を斷言するけれども、其事實に於て淋疾は全治せず是が爲めに恐るべき禍害を將來する例が屢々あるのてある。

慢性淋疾の治療に於ても攝生を要せざる事はないけれども、慢性淋に於ては其經過長き故に其の間に多少の斟酌を加へて差支がない。

慢性疾病に對する局所的療法として一般に行はれるは、硝酸銀「プロタルゴール」等の尿道洗滌であるけれども、斯くの如き刺戟の強い藥液を濫用する時は、却つて排膿せしめる事があり、又一般に浸潤を硬くせしめて治療上に悪影響を及すものである。

其のかように誤つた治療をなす事の多いのは、未だ眞に慢性淋疾に對して詳しく研究した專門家の尠ないのを證明するものである。予は慢性淋疾に對し、硝酸銀「プロタルゴール」過滿俺酸加留謨等の藥液を用ひて尿道洗滌をしたのみで、全治したものを見た事がない。予が慢性淋の全治と云ふのは浸潤の全部吸收せられたものを云ふのてあつて、單に炎症が鎮靜して自覺症狀の薄らいだのみの者を全治とは云はない。何となれば浸潤の全部吸收しないものは、一時治癒した樣に見ゆる事があるけれども飲酒、運動、其他の刺戟に依つて屢々再發し、或は副睪丸炎、或は横痃、或は膀胱加答兒等の續發症を起し、或者は淋毒性の膀胱加答兒から結核性の膀胱加答兒を惹き起して遂に腎臓結核を起して生命を失ふ樣なことさへもあるのてある。

慢性淋疾を根治せしむるには必ず尿道消息子(ブージー)を尿道内に挿入し鬱血療法を行つて浸潤を吸收せしめなければならぬ。而して尿道消息子を使用するには、必ず是を以つて尿道内の浸潤を捜るだけの技倆がなければならない。此技倆が無く漫然消息子を尿道に挿入しても硬性の浸潤は中々吸收せらるゝものではない。現に予の診療所(東京神田區今川小路二ノ十二)に來る患者の中でも、他の醫師に依つて數十回の尿道消息子挿入を受けたと稱するものでも、全然浸潤の吸收して居ないものが頗る多い。

これ即ち慢性淋疾に關して充分技倆のある醫師の少ない事を證明するものであつて吾人の深く遺憾とするところである。

兎に角斯の如き狀況にあるのであるから慢性淋疾患者は泌尿生殖器科專門或は花柳病專門等の看板、又は學位稱號等に迷はされず、實際に實力を有する專門の醫師に就いて充分の治療を受けねばならないのである。

男子淋疾の合併症

男子淋疾の合併症として起る所のものは淋巴管炎及び淋巴腺炎、尿道腺炎、攝護腺炎及び精囊炎等であつて、更に進んでは輸精管道を侵し輸精管炎及び副睪丸炎を起し遂には又膀胱炎、及腎盂炎、腎臟炎等を起すに至るものである。又病毒の轉移によつて發生する合併症としては淋毒性關節炎、淋毒性心臟瓣膜病、淋毒性彩炎、淋毒性腎盂兼腎實質炎及び淋毒性發疹等の疾病がある。

女子の淋疾と病症

女子の淋疾も又生殖器に來ることが多いのは勿論であるが、初め尿道を侵し、膀胱輸尿管、腎盂、腎臟に及び、他の一面に於いては膣より子宮膣部、子宮內膜、子宮實質、子宮周圍組織及び外膜、輸卵管の內外、骨盤腹膜、卵巢に及ぶのである。そして以上の諸部は獨立して病む事があり、或は相共に侵し、重症乃至不治の疾患に移行することあるのである。

淋毒性子宮內膜炎

本症は女子生殖器疾病中最も多いものである。

●●症候　自覺的症候としては急性の場合には惡寒、發熱、頭痛、惡心、嘔吐等を催ふし、又下腹部に牽引樣の感覺があつて且つ腰痛を覺え、全身障碍を起す事がある。又患者は貧血に陷り神經症を起すこともある。他覺症としては粘稠硝子樣の分泌物を排出し、是を顯微鏡で檢査すれば淋菌を發見する。又子宮孔は屢々突出した粘膜緣によつて圍繞せらるゝものである。若し疾病が久しい時期に亘れば上部上皮層の剝離に由つて、子宮頸部は屢々發赤糜爛せる外觀を呈し、子宮外口は膿汁によつて被はるゝ事がある。そして淋毒性子宮内膜炎の經過は屢々極めて短かく數週で全く治癒することもあるけれども、多數の場合は數ヶ月に亘つて概ね慢性症となるものである。

慢性子宮内膜炎は粘液及び膿分泌法外に陰部に灼熱の感があり、薦骨部及び骨盤内に鈍痛を覺え、且つ亢奮時、運動時、若しくは交接、便通等の際子宮の沈降或ひは鹽出する樣な感がある。子宮鏡を以つて檢すれば子宮頸部粘膜の發赤、腫脹及び輕度の外翻がある。内診すれば子宮は輕度に肥大して疼痛を有し、肥大した子宮は膀胱、直腸を壓する爲めに尿意が頻繁である。

●●療法　急性症には安臥、緩下劑、消炎法等を必要とし、炎症症狀が消退すれば局所的療法を行はねばならぬ。急性慢性共にワクチンの注射は極めて大切である。予の診療所(東京神田區今川小路二ノ十二)ではワクチン注射を行つて居るが成績がよい。

婦人の淋疾と婦人科醫

日本の婦人は專門醫の選擇を多くは誤つて居るらしい。婦人の局所病卽ち生殖器と泌尿器とに關係した病氣の全部は婦人科醫の診療を受くるが、獨乙邊の婦人は專門醫の選擇が大いに異つて居る。淋疾や黴毒は花柳病の專門醫に行き、尿病は泌尿器科へ子宮の腫瘍や位置の異常は婦人科醫に行く。日本でも、かうありたいものであると

思ふ。

又婦人の淋疾は男子の淋疾に原因することが多いのであるから、婦人は良人に淋疾があつたか否かを充分注意せねばならぬ。そして若し良人が淋疾に罹つたことがあり只内服や洗滌の治療を用ひた時からであるならば、淋疾は全治して居ないから婦人に感染することがある。故に必ず、優秀な專門醫のブージー療法を受けねばならぬのである。

第二節　黴毒

黴毒の病原は何ぞ

黴毒は一の觸接傳染病であつて、非常に慢性の經過を取るところの全身病である。其の病原體は久しく不明であつたが、千九百五年シャウジン及びホフマン兩氏に依つて發見せられたのである。即ちスピロヘーテ、パンーダと稱する微生物であつて兩氏は最初之を黴毒の初期硬結、丘疹及び穿刺して得た淋巴液から發見したのであるが、次で第二期の薔薇疹、丘疹、膿疱疹からも發見した。更にレックチエー、ラウビチエック、ウオルテルス、ネーゲラート、ステーヘリン、ロブソートフエン等の諸氏は黴毒患者の流血中に於いてもスピロヘーク、パンーダの存在を認め、其他エールマン、レクチエー、バンジー、ジモネリー等の諸氏は第二期の各種の皮疹中から發見し、又スピワツエル、ヂユートレボン、グルーヴエン氏等は第三期の護謨腫中からスピロヘーテパンーダの存在を認明した。

スピロヘーテ、パンーダは其形態コロツプ抜きに似た螺旋狀であつて、彎曲の數は平均十乃至二十を算することが出來る。其の兩端は尖り各一條の細長な靴毛を有する

から、屈折又は蛇行狀、飛鞭狀に運動することが自由であつて、或は一方に向つて螺旋狀の運動をなし、又或は急に靜止した後反對の方向に長軸廻轉の運動をすることがある。

黴毒の傳染徑路

前項に記載した樣にスピロヘーテ、バンーダは活潑は廻旋運動をするものであるから肉眼で見ることの出來ない小さな創であつても、若し皮膚粘膜等に小創があつて是れにスピロヘーテ、バンーダが附着する時はスピロヘーテは是れから身體內部に侵入して黴毒を傳染せしむるものである。而して黴毒の傳染は直接甲の人から乙に傳染することもあり、或は又毒物の附屬した物體を中介として傳染するに至ることもある。其前者を直接傳染と言ひ、後者を間接傳染と呼。ぶ此の二者を後天黴毒と云つて、此の外に親の有する黴毒が母の胎內に於いて子に傳はるものを遺傳黴毒又は先天黴毒と云ふのである。

直接傳染は硬性下疳、濕疣其他第二期黴毒の粘膜疾患の分泌物の如きスピロヘーテバンーダを含有する物質が、皮膚或は粘膜等の小創に附着して黴毒を傳染せしむるものであつて、最も多く兩性の交接によつて生ずるものであるけれども、接吻授乳等に依つても屢々傳染する事がある。肉接傳染は患者の使用した飲食器、楊枝、煙管、衣類等の媒介に依るものであつて、人體も又屢々此の傳染の媒介をなす事がある。それは娼婦等が黴毒に罹つて居る甲の男子に接して間もなく黴毒を有せぬ乙の男子に接し娼婦自身は感染することなくて、甲の病氣を乙に感染せしむる媒介をなす等の例がある。

遺傳黴毒は其の傳染徑路に就いての學者の說は甚だ複雜であつて今尙ほ一定せない

が略說すれば父系傳染、母系傳染の二つとなすことが出來る。要するに胎兒が依體の子宮內に在る間に病毒を感染するものであるが、症狀を發する場合は胎內に在つて已に發する場合もあり又、出產後發することもある。又出產時傳染と云ふのがある。それは出產の際病毒が產道に附着し或は產道に黴毒性疾患を有して居る時、產兒の皮膚の微細な損傷部から病毒を感染せしむるものを云ふのであつて、是は眞正の意味に於いて先天黴毒と云ふことは出來ない。

黴毒の經過

黴毒は頗る緩慢な經過を有するものであつて、初め皮膚或ひは粘膜の損傷殊に陰部の小創から病原體が侵入する時は、期間が潛伏して著しい症候を發することが無い。此の期間を第一潛伏期と云つて此の期間を過ぐれば最初病原體の侵入した部に硬い限局性の浸潤即ち初期硬結を生ずる。黴毒は初め斯く限局性の硬結を現はし潰瘍即ち壞れて傷となることがある。此の傷は治療に依つて治癒するものであるけれども黴毒は決して局所に限る疾患ではないから、此の傷が治癒しても有力な全身の驅黴法を行はない限りは、病毒は全身に廻つて行くものである。即ち日を經ふに隨つてピロヘーテは淋巴管を經て淋巴腺を侵し是れを無痛性に腫脹せしめ、時に不定の熱發頭痛等を發することがあり、遂に全身症狀即ち薔薇疹を發する樣になる。而して初期硬結の形成から薔薇疹を發生する迄を第二潛伏期と云つて、第一潛伏期の初めから第二潛伏期の終りまでを第一期症と言ひ、此の間に表はるゝ症候を第一症候と名づける。此の期間薔薇疹發生後は即ち第二期であつて、丘疹、扁平コエヂローム、膿疱疹等を發する而して是等の症候を第二期症と云ふのである。又是等の二期症は常に顯在するものではなく、一旦消失した後再び發生し、即ち潛伏期と顯在期と相交代して一年乃至

三年を持續するものであるが、時に又五年乃至二十年の久しきに亘りて反覆することもある。

第三期は護謨腫の發生を以つて特徴とするのである。護謨腫は單に皮膚粘膜等に發するばかりでなく骨、睪丸、眼球、腦神經、其他深在の器官に其毒力を擅まゝにし、是等の器官を破壞するものである。

以上の期間の區分はリスール氏に從つたものであるけれども徴毒の經過、症候の如きものは頗る多形であつて、人によつて千態萬狀を呈するものであるから實際は以上の樣に人工的尺度を以つて律することは出來ない。以上の區分は只便利上是を爲したに過ぎない。故に其の一期と他期との境界は決して明劃な者ではなく、又時に第二期と第三期の症狀が同時に顯はるゝ事もある。或は第一期症狀を缺いて第二期症狀を直ちに發することもある。第二期症狀が現はれず第三期症狀を現はすこともある。又經

過が頗る短かく第三期の症狀を極めて早期に現はすものもある。彼の奔馬性徴毒と稱するものは此の經過の短かくて迅速に第三期に進むものを云ふのである。

硬性下疳と其治療法

初期硬結　徴毒の病原菌が微かな上皮損傷部から侵入した時潛伏期の間は其の異常を呈しないものである。潛伏期は通常三週間長くて五週で七週に及ぶことは稀れである。此の潛伏期を經過してそれと其の部に稍紅色を呈した硬固な結節を生ずる。是は即ち初期硬結であつて、之が潰瘍狀になつたものが硬性下疳である。此の硬結が破れて所謂硬性下疳になつても其の深さは眞皮に止まつて皮下に達することは普通はないものである。是は此の潰瘍の特性とも云ふ可きものであつて、潰瘍の周邊は固い浸潤を作る。之れが軟性下疳と區別する主なる點である。

軟性下疳は概ね唯一個現はるゝものであるけれども、時として多數發生するのを見ることもある。斯く多數發生するのは同時に數個所に感染したものであつて、軟性下疳の如く一個の下疳が發生し、其膿が附近の皮膚に附着して漸次數個の發生を見る樣なことは尠いのである。

混合下疳即ち黴毒と軟性下疳とが同時に傳染するか、或は前後して傳染する時は、先きに軟性下疳の潰瘍を生じ、次いで底面及び周邊に硬固な浸潤を來す。

硬性下疳は軟性下疳の如く疼痛を有しないのが普通である。即ち全然疼痛の缺如するか、或はあつても其疼痛は極めて僅微である。

初期硬結の好發部位　硬性下疳の發生するのは多く陰部であつて、男子にあつては龜頭、外尿道口、繫帶、包皮の內面等、又女子にあつては大小陰唇、陰核、子宮外口等である。其他陰部外に於いては大腿內側、口唇、前額乳房、手指等にも稀に生ずる。血して其口唇に生ずるものは接吻、他人の煙管の使用、他人の食器の使用、乳母が黴毒患兒に授乳するに際して傳染して乳房に下疳を生ずることがある。又醫師が黴毒患者に接して、又は產婆が黴毒を病める產婦に接する等によつて手指に下疳を生ずる事もあるのである。

併發症　硬性下疳には屢々橫痃の併發を見るものである。此の橫痃は原發症即ち下疳の發生を認めてから、約八日乃至十日の後に（時として同時な事もある）其の近傍の巴腺が漸次腫脹して硬固となつて、其の大きさが拇指頭大或は夫れ以上に達することがある。然し通常化膿することは無く且つ疼痛を發することも無いものである。

診斷及び鑑別　硬性下疳は數週の潛伏期を經た後に初期硬結を生じ、次いで潰瘍即ち傷を作るものであるが、疼痛を感じないのと、潰瘍が狹い糜爛性緣を以つて圍繞され、且つ周圍には軟骨樣の硬度ある浸潤が來る等のことに依つて軟性下疳其の他と

鑑別することが出來る。尙ほ鑑別を要する疾病を述べて見れば、

一、軟性下疳　此の鑑別は最も必要であり且つ誤り易いものであつて、醫師でも往々誤診することがある。硬性下疳との鑑別との要點に就いては硬性下疳の項に精しく述べたから茲に繰返さないが、併し度々述べたやうに純粹の軟性下疳なるものは極めて尠く殆んど無いと云つても宜い有樣であるから、軟性下疳に對しては充分注意せねばならぬ。

二、陰部富行疹　其の經過の極めて短かいとのであるのみならず小水疱が群生することに由つて其の鑑別は容易である。

三、癌　老年者に發し、且つ潰瘍の邊緣は堤狀であつて潰瘍面は顆粒狀を呈し、激痛を有し、硬度は石樣硬度である。

其他疹癬、粉刺、其他龜頭炎、膣炎等に因する上皮剝脫包內面に於ける單純な損傷

等も外に疑はしむることがあるけれども、大抵は各其の特徵によつて鑑別することが出來る。

豫後　硬性下疳は其の局所は適當に治癒するけれども、黴毒は局所のみの疾患でなく、病毒が全身に及ぶものであるから單に局所的治療のみを施しただけでは全身症の潰發を免れ難い。又局所的でも屢々尿道口狹窄、前部尿道狹窄、包莖若しくは陰莖皮膚の象皮樣肥厚等を來すこともある。

療法　硬性下疳は單に局所の治療のみで、潰瘍とは治癒に至るものであるけれども、單に局所の治療のみで安心して居れば、必ず病毒が全身に蔓延して日を經て二期三期の症候を呈する樣になる。それ故硬性下疳は局所の治療を行ふと同時に全身の驅黴法を施さねばならぬ。局所の療法としては切除法、腐蝕法、燒灼法等の中適當な療法を撰んで施すのであるが、切除法に對しては之を賞用する學者と反駁するものとがある

が、發病後未だ久しく時日を經過せぬ場合に於いては患部を其の周圍の組織と共に切除する事妨げない時、此の方法を施せば其局所に再發することは稀れである。腐蝕、燒灼の二法は其の効果が幾分切除法に劣るのである。潰瘍になつたものは結晶石炭酸を用ひて腐蝕するのが宜い。若し侵蝕性の潰瘍である場合には嚴重な全身療法を施す外にフォルマリン浴を行ふことが宜いのである。

兎に角普通の硬性下疳は、僅かに小さなものであるから患者が輕蔑して居るが、硬性下疳即ち一期の中に充分な治療を施さねば將來危險な目に逢ふ事がある、故に局所療法の外に必ず全身驅黴法を行はねばならぬ。

第三節　軟性下疳と其合併症

軟性下疳

軟性下疳は一種の傳染性局所病であつて、多く男女の陰部を侵すものであるが時として陰部外例へば肛門、直腸内、恥骨縫合、口唇、指頭等の皮膚に來ることもある。

軟性下疳は黴毒とは全然と異なるものであつて黴毒の樣に全身病を起すとのではないが、然し軟性下疳のみが獨立して來ることは非常に稀であつて、最初軟性下疳のやうな症候で來ても多くは硬性下疳を合併して居る場合が多く、所謂混合下疳なるものが甚だ多いのである、それ故軟性下疳と云ふ診斷を得ても常に硬性下疳の合併の有無

に注意する事が甚だ必要である。

ヂユクレー氏によつて發見せられた連鎖狀の小桿菌であつて軟性下疳或は混合下疳の潰瘍の細胞浸潤の間隙に連鎖狀に存在しており、又急性淋巴腺炎即ち横痃の膿瘍壁にも存在するが、然し膿汁の中には普通消失して居ることが多い。

本菌の形態は兩端鈍圓である小桿菌であつて長さ一・五ミクロン幅は〇・四ミクロンで普通多くの場合連鎖狀になつて居る故運鎖狀桿菌と云ふ。然し時として孤立することもあり又細胞の中に集團して居ることもある。

膿汁中の軟炎下疳菌は之れを密閉した器の中に貯へ乾燥させなければ十七日の後に於いても尙其傳染力を有して居るが、併し乾燥させれば多く一二日で傳染力を失ふものである。又攝氏四十二度の溫度に一時間存在するか、或は强アルカリ、弱酸、若しくはアルコールを注ぐ時には其傳染力を失ふけれども寒冷は傳染力を失はしめることが出來ない。又膿は之を百倍に稀釋しても其の傳染力を減殺さるゝことは無い。

症候　不潔な交接を行つて感染した後一日乃至二日で病毒の侵襲した部位に膿疱を生じ多くは組織が糜爛した如くに崩潰して、所謂潰瘍を形成するものである。此の潰瘍は初めは小さいけれども次第に大きさが增し時として最初の三四倍となることがある、軟性下疳の潰瘍は其の邊緣が銳利であつて犬牙狀に出入し、底面は灰白色又は黃白色の粘稠膜樣のもの、即ち義膜を被り多量の膿を分泌するけれども此の膿は空氣に觸ゝば乾燥して痂皮を結ぶ樣になる、そして軟性下疳は普通表面に組織を侵蝕するものであつて、深部に進行する場合は尠く、之を自然の經過に任せても三週乃至六週の後には、組織の崩壞が全く止んで佳良な肉芽が發生して來て瘢痕を形成して治癒するものである。

硬性下疳と大いに異る點で診斷上に主要な點となるのは、潰瘍が周圍の皮膚面から

隆起することがなく、又周圍に浸潤に依る硬結を來すことがない。

自覺的症候としては局部に於ける疼痛であつて殊に之れに觸るゝ時には耐ゆべからざる激痛を覺ゆるとのである。併しながら神經過敏でない限りは發熱其他の全身症候を起すことは無いのである。

以上は軟性下疳の定型的の者であるが、此の外に猶ほ二三の變態型の者がある。

一、毛嚢性下疳　下疳菌が毛嚢又はタイソン氏腺内に侵入して起ることもあるが、或は又然らずして起る場合もある。粉刷狀の小結節として現はれ、其中央の頂點に極めて深い下疳を生ずる。

二、隆起性下疳　分泌物が極めて多量であつて、潰瘍面が未だ不潔な間に肉芽が非常に增殖して、潰瘍の底が周圍の皮膚面から隆起するものを言ふのである。

三、實扶的利性下疳　粘膜例へば膣壁、子宮、膣部等の粘膜發した場合には、下

疳の潰瘍面に一般に灰白色又は黄白色の密着した義膜を被むることは屢々吾人の實驗することろである。

四、壞疽性下疳、下疳中最も惡性の者であつて潰瘍附近の組織を壞疽即ち腐らすものであつて、糖尿病其他の全身榮養障害、或ひは局所の血行障害等の場合に起るのである。之れに局部的血行障害の爲めに潰瘍の周圍が壞疽に陷るに至るものと、局所的原因が不明であつて潰瘍部から、壞疽を起すものとの二つがあるのである。

五、蛇行性下疳、此の下疳は初めに生じた潰瘍の治癒すると同時に、其の隣接部に潰瘍が表はし、斯くして漸次數ケ月或は一ケ年以上も治癒せぬことが屢々ある。

六、混合下疳軟性下疳は其の經過中に黴毒の潰瘍に變化することが多い。是はヂュクレー氏桿菌とスピロヘータ、バリーダと共に傳染したか、或は軟性下疳發生の前後に於いてスピロヘータ、バリーダの侵入したのによるものである。

好發部位、軟性下疳は主として男女の陰部に來るもので陰部以外に來ることは稀である。ペーテルゼン氏の調査に依れば男子に於いて最も多く發生する部位、即ち好發部位は陰莖包皮の內板、(包皮の裏皮)、冠狀溝、(龜頭の溢れ目)、繫帶、(龜頭下面の釣り糸)、陰莖振動部、(龜頭、包皮外板、包皮の外側)、尿道口、陰囊等であつて、女子に於いては處女膜痕、小陰唇、唇間溝、尿道口、子宮膣部、大陰唇、バルトリン氏腺排泄管口部、陰核、前庭前連合、後連合等に好發するのである。又陰部外に於いては肛門周圍、會陰、大腿等にも發する事がある。陰部以外に發生することは男子よりも女子に多く見るものである。

●診斷● 硬性下疳との鑑別診斷が必要である。併し屢々硬性下疳と合併して混合下疳となつて來ることが多い故、醫師でも診斷上に困難を感ずることが屢々ある。

●療法● 横痃俗に言ふよこね等の續發症を防ぐために身體を安靜にし且つ硫酸マグネシア等の下劑を用ひねばならぬ。そして左記の如き適當な治療を施さねばならぬが、勿論素人に於いて能くすべきところの者ではない。

一、切除法、其初期に於いて潰瘍の周圍を健康部から全く切除して直ちに之を縫合する方法である。併しながら下疳は唯一個のみ單發する事は比較的少なく數個同時に發することゝ、又部位によつて切除し難い場合がある等によつて此の方を施し難い事が多い、又患者治療を顧みずして放擲して荒蕪甚しく此の法を施すに困難を感することが尠くない。

二、腐蝕法最も用ひらるゝ方法である。從來は硝酸銀を用ひたけれども、現時は石炭酸が一般に用ひらるゝものである。其方法としては潰瘍を淸拭した後に結晶石炭酸の小片を以つて腐蝕するのである。腐蝕後は沃度フオオムガーゼを當てゝ置くので此際直ちに撒布藥、或は軟膏類を用ゆべきものではない。

三、塗布法、壞疽面を清拭した後に、過酸化水素水を用ふる時は酸素を發生して防腐殺菌の効を奏するものである。

四、肛門或は尿道内に生じた下疳には沃度フォルム坐藥を用ふ。

五、ワクチン療法、軟性下疳菌ワクチン注射は卓効がある。ワクチンの量は毎回〇、五乃至一、〇立方糎を用ひ肩胛間部に注射する。

六、燒灼法、パケラン氏燒灼器又は電氣燒灼器を用ひて下疳を燒灼する。

軟性下疳の合併症

横痃 横痃俗によこね(便毒)と云ふのは鼠蹊部即ち大腿の付根の部分に於ける淋巴腺の腫脹の總稱であつて、之れには花柳病性の者と非花柳病性の者とがある。非花柳病性の者と云ふのは下肢、陰部、肛門附近の濕疹、創傷等から病毒の侵入するに原因するものであつて多く吸收するけれども稀に化膿することがある。花柳病性の横痃と云ふのは軟性下疳黴毒、淋疾に原因して起るものであるが、黴毒及び淋疾に依るものは各其部に讓ることゝして、茲には軟性下疳に因つて發生するものを記述する。

軟性下疳の合併症中横痃は之れを發することが最も多數を占むるもので、下疳に强き收創劑を塗布するか、或は激しい運動をなした爲めに生するものである。そして下疳の經過中に横痃の續發する時期は感染後二週間以内に最も多いものであると從來の文献に記されてあるが、予の診療所に於いて實驗するところに依れば、屢々二週乃至四週の後に發するのを見る。

症候 横痃が生ずれば初め起座に際して鼠蹊部に疼痛を感じ患側の下肢は伸展を妨げられ疼痛は歩行の際に增激する。そして一二日を經て疼痛の益々加はるに從つて輕度に體溫の上昇を來し、皮下に於いて一個乃至數個の淋巴腺の腫脹を來す。此の際自

體を安靜にして適當な治療を施せば容易に治癒するけれども、尙ほ數個が侵され腫脹が益々甚しく壓痛があつて腺の周圍にも炎症を及ぼす時は數個の腺が相合して凹凸不平の塊となつて周圍の組織及皮膚と癒着し、皮膚は紅色乃至藍色に變じて腺の內容は化膿して波動を呈する樣になり、尙は之を放擲すれば遂に自潰して多量の膿汁を漏して疼痛其他の自覺症候が頓に消失する。自潰後に於いて創口に漸次良好の肉芽を生じて治癒するのが普通であるけれども時に創全體が下疳に變じて下疳性橫痃と變ずる樣なこともある。

療法　橫痃は淋巴腺の炎症であるから炎症を鎭むるの方法として未だ化膿せない間に在つては絕對に安靜を嚴守すると同時に左記の療法に從つて適當に處治せねばならぬ。

一、罨法、冷罨法、氷罨法が必要である。

二、塗布法、初期に於いて沃度丁幾を塗布するものもあるけれども奏効は確實でない。

三、塗擦法、水銀軟膏を用ふるのが普通であるけれども、ヤウスキー氏は水銀軟膏の塗擦は消炎法として効はあるけれども皮膚を刺戟して却つて、濕疹を起すことがあると云つて水銀軟膏の塗擦を懲懲しなかつた。

四、頓挫法、ウエランデル氏は昇汞食鹽水或は安息香酸水銀液に食鹽を加へたものを注射すれば、注射後に輕度の疼痛があるけれども、第二日には疼痛が減退して浸出物は吸放せらるると云ふ。然しながら此の方法を用ひれば却つて化膿を促すことがある。

以上の消炎法を施しても其の目的を達することの出來なかつた時、即ち化膿した時には排膿の法を講じなければならぬ。それには穿刺注射法、欝血法、切開法、摘出法

等があるが、切開法は充分化膿した時期を撰んで局所麻醉の許に皮膚を切開し、鋭刺を以つて病的組織を全部掻爬し除去するのである。

五、前述の諸療法の外ワクチン療法も亦重要な一の治療法である。

第五章　性慾進化論

放縦性交時代

原始時代の人類の性慾要求の滿足は、動物の其れと毫も異る處は無かつた。性交行爲は公然行はれ、男女とも裸體の儘歩行して毫も耻づる處は無かつた。斯うした原始的階級のものは現今も尙往々野蠻人の間に認める事が出來る。例へば濠洲の土人、ボリネシア人、馬來人等である。

彼等の男女關係は殆ど動物の如く放縦で、其の性交は時として親子の間に行はれ或ひは兄弟叔姪の間に結ばれる。其の性交の場所の如き、森林たると道路たるとを選ばない。隨所にこれを行ふ事恰も犬猫同樣である。併し彼等と雖も人目を避ける事はあ

る。故に學者によつては此の一事を以て彼等にも猶羞耻心があると主張する者がある。併し元これ彼等が人目を避けるのは羞耻感情からではない。他人に邪魔をされないが爲め、邪魔をされては充分に滿足する事が出來ないからである。併し此の一事がやがて人智の進歩と共に羞耻心に進化したものである事は否まれない。

彼等の間には貞操の觀念などは殆ど無い。婦女は一種の賣物、動產であつて、賣買、交易、贈與の對象物であり、肉慾滿足の一道具たるに過ぎない。女兒は幼時から一種の猥褻なる舞踏を其の母から敎へられる。そして性交可能期に達すれば有らゆる男子の手に轉々受授される。一人が獨占するには相應の賠償を支拂はなければならぬ。其の賠償は物品である場合があり、生首や鮮血である場合がある。

男女とも裸體である。彼等はこれを掩ふ必要は無いと思つてゐる。稀れに木の葉や布片の類を以て型ばかり陰部を掩ふものもあるが、其れは多く文明人の入り込む處に限られてゐる。文明人に敎へられて漸く其處までの文明に達したのである。彼等は元來陰部を掩ふ事を不自然とし耻辱として居るのである。クックの說によると彼等蠻族には猥褻といふ觀念は全然無いさうである。其の性交に對する心理の如き恰も親子兄弟の間に會食されるのと何等變つた心持は無いのださうである。

これ等蠻人の狀態が其の儘、吾人の視光時にもあつたのである。やゝ進んで陰部を掩ふやうになり、性慾行爲を隱蔽するやうになつた。これは羞耻心の發達によるのである。羞耻心は前にも云つた如く敵人の視線を怖れる處から始まつたのであるが、一面氣候の寒冷に促された傾きもある。氣候の寒冷な爲めに止むなく身體を被はざる可らざるに至り、其れを掩ふ事がやがて羞耻心を發生せしめたのである。故に溫暖な地方即ち南方人種よりも北方人種の方が早く此の文明に達し、南方人種には未だに原始的狀態に止まつてゐるものがあるのである。

やがて親子間の性交が禁ぜられ、兄弟姉妹の間の性交が忌まれるやうになつた。併しこれとても元道德として生れた觀念ではない。絕えず顏を見合せてゐる彼等の間に性慾的興味が無くなつた事から始まつたのである。其れが進化して今日の人倫道德を形成したのである。

結婚形式の進化

人類は從前の遊牧生活を去つて上着となると共に、鄉土、家屋を建設した。從つて其處に家婦の必要が起つた。今日の妻妾の起源である。

併し其の妻妾は盛んに交換せられた。夫は自己の妻妾を交換し得るのみならず、場合によつてはこれを賣買し、擔保とした。妻妾はこれに對し何等苦情を唱へる權利は無かつた。故に若し其の妻妾にして夫の命令に從はない時は用捨なく打擲し、時には

これを撲殺した。

此の風習は古代希臘人の間にも行はれた。ソクラテスの如き聖哲にして尙且つ屢々其の妻を他人と交換した。當時希臘の名門で此の風習を行はなかつたものはないといふ。但しこれは希臘の民政が共有主義を採り、婦人及び小兒を國家の共有としたのに因る。

女性は奴隸若しくは物品として取扱はれ、男性の性慾滿足の一道具たるに過ぎなかつた。やがて人類に私有財產なるものが生じた。女性と共に財產の一部に加へられた。女性は自然一方に偏した。こゝに賣淫なるものが起つた。(賣淫の起源に就ては次項で說明する)。

米國の人類學者リエウイス●モルガンの說によると、一體人間が今日の一夫一婦制になるまでには、大凡左の五形式を經て來てゐるといふ。

第一期　亂交時代、これが最も原始的な時代で、前に述べた親子兄妹全く見境ひの無い時代である。(此の時代には今日犬猫などに見る交尾期と稱するやうな時期が人類にもあつて、其の時期以外には性慾は無かつたと說く學者がある。進化學的に考へて見て、さもあつたらうかと思はれる。)

第二期　半血族亂交時代、此の時代から親子間――と云つても其れは單に母子間の事である――の性交が禁ぜられ、同母ならざる兄弟姉妹が他の一群の姉妹と團體的婚姻をしたのである。無論誰れが誰れの夫妻と極つてゐた譯ではなく、また父を同じうした兄弟姉妹は何等の制限が無かつた――といふよりも、誰れが誰れの父、やら子やら解らなかつたのである。

第三期　一時的一夫一婦時代、一男一女の結合ではあるが、離合極めて自由容易であつた。

第四期　一夫多妻時代、此の時代に男權が確立せられた。從來母系制であつたのが父系制に變つたのである。女性を物品視し或ひは奴隸視したのも此の時代である。

(これまでは餘り男の權力は振はなかつたとモルガンは云つてゐる)

第五期　一夫一婦時代、今日一般に行はれてゐる一夫一婦である。

野蠻時代は先づ第二期から第四期までゝあらう。第四期の終り頃から性慾生活も稍〻文明的色彩を帶びて來てゐる。同じ米國の社會學者レスター・ウオードが其の著「純正社會學」で次ぎの如く論じてゐる。

『人間が動物の狀態を脫して、世界の各地に廣まる事が出來たのは、全く腦髓の發達したお蔭である。人類は更に腦髓によつて、性交と生殖との因果關係を認知した。其れと共に、男性は遂に自己の父たる意義を自覺した子を造るのは、獨り女性のみではない事を知るに至つた。かくて革命は來た。女性の權威は地に落ちた。(ウオードの

説に於ては、女性を以て生物の原始根幹となし、男性を以て後代に派生した附屬物となしてゐる。陶汰の力は女性から男性に移つた。ウォードは男性は生物史上比較的後代に生じたもので、其の一人前の個體となつたのは、全く女性の有した趣味性の擇擇の結果に過ぎずとなした。女性は憫むべき奴隷の地位に下つた。男性支配の世となつた。斯くて生じたのが即ち父家長制である。父家長制は可なり長く續いた。其の間に女性は全く財物化されて了つた。財産の一部としての外には、女性の意義は少しも認められなかつた。女性は有らゆる酷遇に堪へねばならなかつた。然るに其の後、種族と種族の戰爭が頻繁となるに及び、女性の地位は幾分か緩和された。捕虜は奴隷になつた。種族内に階級が生じた。遊惰階級の男子は多くの女子を貯へた。男子の美感が發達した。男性陶汰が愈々盛んに行はれた、其の結果として、女性の身體に著しい變化が生じた。其れは無論一部の女子に過ぎなかつたが、併し其れでも女性美の典型を作るには十分であつた。女性を美しき性と稱するに至つたのは此の時からである。併し男性陶汰の結果は、一般に女性の爲めに不利益であつた。男性陶汰は女性の體力を益々微弱ならしめ、男性に對する依賴心を益々強大ならしめた。有史以後の全時代を通じて、女性は絶えず不公平なる法律、偏頗なる道德、無慈悲なる習慣によつて苦しめられ惱まされて來た。彼等の實力を發揮すべき機會に一切閉塞されて了つた。彼等は假令實力を有し、要求を有してゐても、其の實力を實現し、其要求を遂行すべき、適當の機會を得る事が出來なかつた。斯くて女性の壓迫、女性の排斥は遂に全く其の極點に達した』云々。

性慾生活の發達が女性の地位を變化させたのである事は此の一節を讀めば了解される。

前にも述べた如く、人間には生命慾の外に食慾と性慾と利慾とがある。利慾は比較的後に起つた慾望で、食慾と性慾とが最も原始的な慾望である。人類は食慾を滿たす爲めに食物を攝り、性慾を滿たす爲めに性交を行つた。處が其の結果として子孫が生れた。人類は其の結果に驚愕した。そこで、文明人ほど性慾關係を神聖視して、人生に故ける最大重要なる儀禮として婚姻なる形式をとるやうになつた。

斯くの如く、文明人は婚姻なる形式を以て最善としてゐるが、文明の度が進めば進むほど經濟組織が複雜となり、自然其處に生活難なるものが生じ、財産の無い者は容易に婚姻が出來なくなつた。併し彼等とても何處かで其の慾望を滿たさなければならない。そこで安價に且つ容易に性慾を滿たし得る機關が必要になつた。其の要求に應じて生れたのが賣淫である。故に賣淫なるものは、賣る方も無論貧乏の爲めであるが買ふ方も貧乏の爲めであつた。

然るに、斯うして貧乏人の爲めに出來た賣淫が、事實はだん〳〵金持の手に奪はれて行つた。これは何故かと云へば、元來賣淫は其の名の如く賣るのであるから、買ふ方に金があつて少しでも高く買つてくれゝば其の方へ賣る。從つて値段がだん〳〵競り上つて行つて、自然貧乏人には手が出せなくなり、金持の手に奪はれて行つたのである。社會主義者流にいふと、茲にも又富豪の横暴を見るといふ處である。

また、一方斯ういふ見方もある。シルレルは美術の起源を以て人に遊戯心がある爲めとし、これをスピール●トリーフの作用と名づけた。スピール●トリーフは生活に餘裕のあるものが、其の生活力を消費せんが爲めに發作するものであつて、一方に於ては精神的に美術の製作、觀照となり、他の一方に於ては性慾、食慾を滿たさうとす

る動作となる。故に生活に餘裕の無い者よりも、生活に餘裕のある者のスピール・トリーフの作用の強いのは當然であるから、賣淫が自然富者に占領せられたのだと云ふのである。

起源的賣淫には左の三種がある。

（一）接待賣淫、これは一家内に客來のあつた時主人が自己の利益の爲め、或は尊敬する客等の場合に、自己の妻妾又は女奴隷、自己の娘等を客に提供するのである。客はこれを辭退するのは却つて失禮であるとされてゐる。今に此の風習の遺つてゐるのは、南洋、亞細亞ではヒマラヤの西方、カムチャッカ等で、遺憾ながら我が日本にも或る形式の下に此の風習が遺つてゐる。家柄結婚や財産結婚――は極端に云へば戀愛から出發しない結婚の凡て皆――此の接待賣淫の一形式である。

（二）宗教賣淫、これは古くバビロンに行はれ、後希臘に傳はり、孟買には今現に

盛んに行はれてゐるといふ。寺院の殿堂で巫女のやうな舞妓が參詣者の希望によつて肉を提供し、一種の報酬賽錢を貰ふのである。これが今日の娼妓の起源で、此の賽錢が後に玉代となり祝儀に進化したのである。故に今日の女郎なる者も其の起源は實に神聖なる處の寺院の殿堂より發してゐるのであるから、心ある者は大にこれを崇拜し、玉祝儀もこれ淨財なりと心得、せい〳〵喜捨信仰すべきである。呵々。

宗教賣淫には又別に一種の形式がある。其れは僧侶は神の保護の下にあるものであるから神聖だといふので、自己の妻又は娘を提供するのである。これは現に南洋などにも行はれ、日本にも――今は何うか知らないが、つい先頃迄――行はれてゐた。日本で最も有力なる某宗派の所謂御連枝なる者が、地方へ巡錫に出かけると、生佛樣の御來降だといふので、富豪や權門が自己の娘を我れ先きに爭つて提供するのである。そして其の御連枝樣のお手がついたとなると、お剃刀を頂いたよりも有難く、娘は元

より一家一門これを無上の光榮とし、今度は又富豪や權門が爭つて此の娘を嫁に貰はうとするのださうである。これは現に其の宗派の僧侶であつて、其の宗派の腐敗に憤慨して僧籍を脱した某氏に聞いた實話である。

また、或る地方では神を信仰するあまり、寺院内で衆人に自己を提供するのがある。僧侶に提供するものもある。昔の神樣の申し子などといふので、多く僧侶や神宮から頂いて來たのが多いのである。前に亂交時代に一人の女性を獨占しようとする場合には、相應の賠償を拂はなければならなかつたと云つたが、其の代償の一種として、其の獨占しようとする女性を或る一定の期間寺院へ提供して、衆人若しくは僧侶の自由に任せた事がある。其の形式が漸次專門的に發達して行つて、前に述べた巫女のやうな職業婦人が現はれ、其れが純然たる職業的賣淫婦に進化したのである。よく昔物語にある神樣への人身御供といふのも、此の宗教賣淫に他ならないのである。

（三）祭禮賣淫、今日の盆踊は其の遺習であるとされてゐる。或る一日なり二日なりの祭日を定めて、其の日に限つて人妻たると娘たるとを問はず、野合的に性交が行はれるのである。あらゆる男はあらゆる男の妻や娘を自由にする事が出來る代りに、自分の娘や妻も又他人に提供しなければならないのである。原始亂交時代の遺習である。

次ぎに婚姻の起源であるが、今日に於てこそ婚姻は人生に於ける最も眞面目なる儀禮の一とされてゐるが、元を云へば一種の賣淫の進化したものであつて、たゞ野合若しくは姦通よりも規則正しく變遷し來たつたに過ぎない。這んな事を云ふと、道學者先生達に叱られるかも知れないが、事實であつて見ればこれ又是非がないのである。

婚姻とは或る形式の下に男女の正當に結婚する事を云ふ。定義は斯うである。けれども、正當の結婚にして實は賣淫であり、野合にして實は正當の婚姻である場合が、

我が日本には非常に多い。一體、廣義の賣淫とは正婚外の淫行を云ふ。茲に云ふ正婚とは法律が認めた結婚とか、親の許した結婚とか云ふ意味ではなく、相互の愛から出發した戀愛によつて成立した結婚を云ふのであつて、其の他の結婚は如何なる形式の結婚でも、吾人が謂ふ處の正婚ではないのである。故に愛の無い結婚や生活の爲めの結婚や政略的に行はれた結婚は皆盡く賣淫である。何故其れが賣淫であるかと云へば、其の婚姻が婚姻其のものを目的とせず手段として、有形無形に代償を得んとしてゐるからである。例へば、先方は生活が豐かであるとか、家柄がいゝとか、或ひは大學出の月給取だからといふ事其の事が目的であつて、戀愛其の者が目的ではないからである。若し其れが種養子である場合には、賣淫よりも一層愚劣な種馬と同じ事である。何となれば、戀愛は第二であつて、生活の豊かである事、家柄がいゝ事、大學出の月給取であるといふ事によつて、娘は妾禍?を得、其の兩親は其の娘の幸福によつ

て安心を得る事即ち無形の代償を得る事を目的として、娘を嫁入らせた事になるからである。故に貧乏華族が其の娘を成金に嫁入せらるが如きは純然たる賣淫である。彼の妾と稱するものも若し其の世話になる一人の男に長く自己を提供してゐれば廣義の賣淫となるが、男を屢々取り換へれば狹義の賣淫即ち職業的賣淫となるのである。

婚姻の形式は地方や民族によつて異つてゐるが、要するに賣淫の形式の進化したものである事は、今日婚約のととのつた印に結納なるものを受授するのを見ても解る。結納なるものは婦女を賣收して妻とするに際し、其の婦女の價格に對する報酬若しくは手附金として、夫たるべき男の婦女の父母に仕拂つた代償の變化したものである。

婚姻の最も賣淫に近いのは原始的狀態にあるものであつて、婦女はたゞ男子の性慾を滿たし、酒掃薪水の勞を執るべきもの即ち奴隷の一種と見做されてゐたのだから、其の形式の如きも奪掠、賣買等によつて行はれたのである。

（一）奪掠婚、とは結婚せんとする男子が、突然婦人を襲ふて奪掠して來るのである。最も原始的なる婚姻法で、今日では濠洲、南洋諸島に行はれてゐる。此の種の婚姻をなす種族は一夫多妻であるのを常とする。

（二）賣買婚、は奪掠婚の進歩したものであつて、暴力の代りに一定の代價を拂つて婦女を自分のものにするのである。此の賣買婚から發達したのが、今日、普通に行はれてゐる處の婚姻法である。現時賣買婚の行はれてゐるのは、亞米利加カリフオルニアのカロリ人、シヤチカ人、英領コロンビヤ及びバンクーバ島の土人、亞細亞のカールミツク種族等である。併し賣買婚はこれ等の蠻人や未開人に限つた事ではない。支那、朝鮮、日本の內地にも種々なる形式のもとに行はれてゐる事は前述の通りである。

今日、文明國人の婚姻法は一夫一婦の結合であるが、野蠻人、未開人、文明人種の初級にある者は一夫にして多婦を娶り、一婦にして多夫に見える處がある。即ち多妻式多夫式である。

モルモン宗やマホメット教では宗旨の上から、一夫にして數名乃至數十名の婦を娶り、土耳古、波斯、印度等でも宗教上の教義に基いて、一夫にして同時に數名の妻と同棲するものがある。隣國の支那及び我が朝鮮でも上流社會に行く程多くの妻を娶り第一夫人、第二夫人などゝ稱ふ習慣がある。死んだ袁世凱の如きは確か第十三夫人ぐらゐまであつた筈である。妻と稱ばないまでも、我が日本の上流社會にも第五六號ぐらゐまでの附錄を持つてゐる者は澤山ある。彼の××煙草で有名な故人某の如き、第五十二三號まであつて、一々名を覺えてゐられない處から、第一番第二番といふ風に番號を附して置き、其れ等の女に生ませた子が『勿驚たつた六十何人』とかであつたといふ。斯うなると一種の偉人である。

多夫式といふのは、一人の婦が多くの夫に接するのであつて、例へば西藏人が一家數人の兄弟で一人の妻を共有するが如きである。此の西藏人の妻は其の何れの夫に對しても一樣に柔順でなければならない。故に彼の地に於て良妻賢母と稱するのは斯うした婦人で、夫によつて愛情や待遇を左右するなどは不貞として擯斥せられるのである。

これは今日全く其の跡を絶つてゐるが、國家共同婦人といふのがあつて男子は其の如何なる婦人にも接し、女子は又如何なる男子にも見える事の出來る制度があつた。原始亂交時代の遺風であつて、古代希臘に行はれた共同結婚が其れである。彼の武をもつて鳴らしたスパルタ人は此の主義をとり、婦人及び小兒は國家の共有として、誰れの子誰の妻といふ事は殆ど無かつたのである。勿論形式は違ふやうであるが、婦人及び子供を國有若しくは共有とする事はボリシエビズムの理想らしく、此の頃露西亞の勞農政府は此の施政法を採つてゐるとかいふ事である。

服裝の性的進化

人類の文明と知能との進歩しなかつた時代には、嗅覺、觸覺、聽覺、味覺等が、人類の性慾を牽引する重要な官能になつてゐて、視覺の如きは餘り有力なものではなかつた。然るに漸次人類の知能が發達するに從ひ、最も多く視覺を介して性慾を刺戟するやうになつた。從つて他の官能——嗅覺、觸覺、聽覺、味覺等の——性慾を刺戟する範圍が縮少せられ、視覺の範圍がこれに更つて擴大せられて行つた。此の變化が人類をして漸次動物的獸性から脫却せしめ、異性の容色、擧止、服裝等によつて審美感を刺戟し、人間の性慾を直接間接に惹起せしめるやうになつた。

今日吾人々類が五官中視覺によつて最も性慾を刺戟されるやうになつたのは、實に

斯うした進化の道程を踏んで來てゐるのである。(吾人が觀照して美の感想を享けるのは、多く間接に性慾を刺戟するを條件としてゐる。象形美術の視覺に訴ふべきは勿論音樂の如きに至るまで人間の性慾を刺戟する點に美ありといふも過言ではないのである)。

原始時代若しくは野蠻時代には、人類の想像力が極めて痴鈍であつた爲め、單に異性の容色、擧動、服裝を眼にするのみでは、性慾を刺戟する事が困難であつた。故に此の時代の人類は生殖器を露出して異性の注意を喚起し、性慾の刺戟に資した事は、ハヴエロック・エリスの云つてゐる通り、歐洲の中世時代に於てすら、男子の服裝が容易に局部を露出し得るやうに裁縫せられてゐた事實を見ても推察する事が出來る。

人類の知能及び視覺が劣等且つ痴鈍で、生殖器を露出し異性の性慾を動かすに非ずんば、生殖の大倫を遂行し能はざりし時代に於ては、異性の注意力を生殖器に集中する目的を以て、人工的に局部を大小ならしむるのみならず、裝飾を加へて人目を惹くやうな習慣が生じた。

英國のナイトアントルウ・スミスがダーウキンに報告した處によると、南阿弗利加のホッテントッド人の女性は局部を大きく見せるやう仕掛ける習慣があるさうである。英人グニエルの著「トポグラレキー・オブ・ギニア」によると、西阿弗利加ジャブー族の蠻人も女性の局部に加工する習慣があり、人工的に陰唇及び陰核を漸次大ならしむる事に努力するさうてある。

如何なる人種も其の原始的裝身は必ず刺青(文身)てあるが、現に原始時代と同一程度の文明にありとされてゐる亞弗利加の蠻族リユクノール人は局部に文身し、稍や進んだところで其の部に奇怪なる布片を纏ふのを常としてゐるといふ。英國の旅行家マーテルスが彼等の一男子に對つて其の何故なるかを問ふた處が、其れは貴下等歐洲人

が衣服を纏ふのと同じやうに、要するに異性を悅ばさんが爲めであると答へたさうである。

日本婦人の褌裙の如きも、身體を保護する目的と見るよりは、寧ろ原始時代に異性の注意を惹かうとした裝飾(遺風)と見る方が適切である。色彩の最も原始的なるものは紅色である事は、小兒や野蠻人が紅色を悅ぶのを見ても解る事であるが、日本婦人の褌裙の多く赤色であるのも此の理を以て說明する事が出來る。一體、日本婦人に限らず、又男女に限らず、何れの人種を問はず其の纏ふ處の褌裙の起源は何れも裝飾の遺風と見た方が適切なやうである。

併し、性的機關は身體の中央部に位置し、異性の注意を惹くには、異性の眼を下部に向けさせなければならぬ。殊に女性の局部はこれを外面から觀察する事が甚だ面倒である。そこで自然性的機關によつて異性の注意を惹く事が廢れて行つて、異性と相對して直ちに其の注意を換起し易い部分、即ち胸部若しくは頸部、頭部、顏面に裝飾を施すやうになつた。これが衣服の起源であると共に紅粉の起源である。(衣服に一面寒冷に促されたのでもあるが、褌裙と同じやうに此の際裝飾として發明せられたものと見る方が適切である。日本婦人の裾模樣が異性の注意を身體の下行部に向けさせようとした目的から生れたものである事は、此の理で說明する事が出來る。

人智發達は要するに想像力の發達である。故に異性の注意を直接性的機關に導かずとも、顏面其の他の裝飾によつて、容易に異性の性慾的感覺若しくは連想を惹起せしめ得るやうになつた。身體中最も他の視線を集中し得る部分は、顏面から頸部に續いて胸部である。從つて衣服を纏ふ事を知らない野蠻人の第一に施す裝飾は顏面、頭髮及び頸部の邊りである。亞米利加インデアンが盛んに繪具を顏面に塗り髮を山の如く築いて羽毛を簪すが如きは、何れも異性注意を容易に且つ早く惹かんが爲めであ

る。

人生るれば皆母の懐に抱かれて乳を哺ふ經驗がある。其の觸感は大人の性的接觸狀態に於て享ける觸感と類似したものであつて、然り此の哺乳は祖先代々の其の又祖先の原始時代から繰り返された經驗であるから、人は男女に關はらず異性の胸部を見る時は、其の部分に接觸して受くべき快感を先天的に連想し、同時に性慾的刺戟を感受するものである。日本婦人が半襟に意匠を凝らし、西洋婦人が頸飾や衿卷に思考を重ね、男子がネクタイやカラーに苦心するのも、皆異性の注意を喚起し、性慾を刺戟せんとした遺習に外ならないのである。

洋の東西を問はず野蠻人には必ず文身の習慣がある。これは繪具其の他の顏料によつて裝身し、異性の注意を惹く事を知らなかつた時代の裝身術とも見るべきものであつて、最初は最も早く且つ容易に異性の目を惹く顏面部に施したのであるが其れが漸

次發達して顏面部のみでは滿足せず、これに美術心が加はつて、遂に全身に文身するやうになつたのである。衣服が一面に於て天候に對する身體保護の目的によつて發明せられたものである事に異論はない。併し又褌裙の廣がりを大きくしたものとも見られ、又一面には全身に施した文身の變化したものであるとも見られる。

更らに、これは少し深入りし過きるやうであるが、總じて今日の禮儀作法なるものは異性の性慾を刺戟せんとする目的の爲めに組織せられた約束であつて、盛裝其の物が既に其の目的から生れたものであるらしい。現に日本婦人が裾を割つて坐するが如き、其の源はやはり玆に發してゐるのである。

性慾と道德感情

性慾生活の文化的發達上、最も有力なる動機となつたのは、女性を道具視せず、一

個の人間と見るやうになつた事である。從つて女性は男性求愛の對象となり、從來の單純なる官能的性慾感情に道德感情が添加せらるゝやうになつた。そして、兩性互ひに精神的に肉體的に優越點を見出し、夫れによつて相互に牽引を感ずるやうになつた。戀愛の起源である。

女性は又自己の刺戟がたゝ自己の愛する男子にのみ屬すべきものなるを感じ、其れ以外の男子に對しては自己を回避せんとする興味が生じた。これが羞恥感情以外に生じた性慾的忠實即ち貞操の起源である。

早く此の文明に達したのは、東洋人では古代埃及人、イスラエル人、希臘人等で西洋人では日耳曼人であつた。これ等の民族は早くも彼の婦女を客への接待に出すが如き事はしなくなつた。そして、羞恥、童貞、節操等の感情が速力で發達した。

性慾生活の敎化は其の後基督敎によつて強い衝動を蒙つた。女性は男性と同樣の社會的階級に引き上げられ、男女間の結婚は宗敎道德的制度の下に、一夫一婦にして永續的契約によつて行はれなければならなくなつた。斯くて基督敎國民は他の何れの民族よりも早く精神的に物質的に優越性を生ずるに至つた。

印度、支那の文明は性慾生活を除外した。女性は長い間奴隷的境遇に甘んじてゐなければならなかつた。佛敎は女人を罪障多きものとし、孔子は女子と小人は養ひ難しとした。併し、泰西にも道德的退行の時期があつた。道德の退行には必ず性慾生活の秩序紊亂が附隨した。例へば羅馬帝國、希臘、ルイ十四世及び十五世治下の佛蘭西の如きが其れである。かゝる時期には國民の性慾的道德が一齊に麻痺の狀態に陷つた。

性慾生活は一面かゝる文化的發達をなすと共に、一面審美的に著しい發達を遂げた。就中浪曼的文學の影響は戀愛をして純美高尙のものとし、幾多の詩人は醉へる如く戀愛を謳歌し絕唱した。斯くて性慾と戀愛とは全く別種のものゝ如く見らるゝに

至つた。併し、本來性慾と戀愛とはこれを分離して考へ得らるべきものではなかつた。所謂幻滅の悲哀が來た。現實は曝露された。戀愛は性慾の假面に過ぎなかつた。自然派文學殊に官能文學は戀愛の假面を性慾生活から剝り奪つた。人々は陶醉から醒めた。性慾生活の眞面目な科學的研究が始まつた。

第三章　性慾の生理的心理的觀察

性慾本能とは何か

人間の性慾本能に就きては、古來より諸種の說があるが、その古くより行はれたところに依れば、性慾は排泄本能であるとされ、モンテーン、モーア、フエレー等の諸氏は此說を是說して居る。即ちこれを詳言すれば、精液の蓄積したるものを排泄せんとすることが性慾本能であると考へられたのである。

此の種の說は主として自然科學者の唱ふるところで、ヘルマンは性慾は充滿せる胚腺より出づる壓迫反射であると定義し、レーウエンフエルトは性慾とは特殊なる生殖的快感を求むる慾望と、生殖機關より生ずる不快の感覺を去らんとする慾望とより成

れるものであると云ふて居る。

其等の諸説は、單に自己の感覺にのみ訴へた主我的のものであるが、人類と云ふものゝ關係を廣く見渡してそして、性慾本能に就いて説いたるものにウエーベルがある。ウエーベルは「人間の性慾はもと種族の保存の爲めに起りたるものなれども、其の發顯の目的及び形態は爾後變化して、其の根本の狀況より相異りたるものとなるに至つた」と云ふて居る。

性慾を以て排泄本能と做すものは、性慾生活の主要目的は排泄的快感を滿足せしめんとするにありて、生殖と云ふことを決して主として居ない。併し性慾本能から人間が未來の種族に關して豫想し觀念することを全然控除することは出來ない。例へば結婚すれば必ず子の生るべきことを豫想し、業務を勵み金錢を貯蓄し、其の子を立派に敎育すべく準備を整へ、茲に初めて結婚し、子女を得てそれを充分に敎育する場合の

如きは、單に排泄的快感を主とせる性慾行動ではなくて、人類に最も必要な生殖であつて性慾本能を完全に遂行したものである。

性慾は本能の流露であると云はれて居る。併し流露と云ふことは必らずしも放恣と云ふことではない。若し極端なる快樂説を取りて、性慾は只性的本能を滿たさんとするのみの慾望であるとするならば、それは人類の尊さを傷くるものである。

性慾發現の遲速

性慾に關する從來の思想は隨分謬つて居つた。從來性慾と云へば直ちに煩惱罪惡を聯想した是れ迄の多くの宗敎家、道德家は皆性慾に對しての謬想に囚はれて居り佛敎の敎ゆる解脱と云ふことも、性慾から脱離することが最も重要なものとされ、基督敎の稱する救ひと云ふものも、性慾から救ひ上げるといふ意味が、その重きをなして居

つた。それで、佛敎の僧侶も、基督敎の(舊敎)僧侶も、身の淸淨を保つ爲めには、性慾から離れねばならない、それには獨身生活でなければならぬ。婦女を見る事は大の禁物である。又世俗と交ると罪惡の誘惑となるから、寺院會堂に身を殁して、世間とは全然隔離し、そして性慾を脫離し、總ての罪惡から離れねばならぬと思惟した。

性慾は左樣に劣惡、卑賤なものであつて、單に惡の基礎をなすだけのものであらうか、それは性慾を縱斷せる半面のみを見たもので、他の半面を見ないから起つた謬りである。

一體性慾は、人間の人間たるに無くてならぬもの、即ち人間生活の基礎となるものであつて、人類の光輝ある進化の源は、性慾の結果に依ると云はれて居る。是れに就いて「人類の進化の歷史は、男女兩性關係の歷史卽ち性慾の事實である」と云ふた人のある程人間生活の基礎を示して居る。

そして人類の性慾生活は、他の高等動物と異り、年中不斷のものであるが、人類間に於いて其の人種、文明の程度等に依つて、性慾性態は一樣でない。例へば亞弗利加黑人及び東印度人は、十歲乃至十二歲で性慾發動期に至り、瑞典及び諸威人は十五歲乃至十六歲で發情期に達する。

獨逸のグリークルが、伯林の女子六千八十九名に就いて調査した所に據れば十四歲より十六歲の間に初めて月經を見るもの最も多く、平均して十五年一月である。又シユリヒチングがバイエルンの女子一萬五百七十人に就いて調査した成績は十四歲より十八歲の間に初めて月經を見るもので、其の平均は十六年一ケ月である。本邦の婦人にありては統計上平均十五年一ケ月で發情期に達するものである。本邦人と雖も又是れを區別すれば、本島人、アイヌ、琉球若しくは臺灣人との間自ら性慾發起に遲速がある。又都會人と田舍人との間にも差異があり、前者は後者より一般早熟である。此